

日本IT書紀

05 淹滞篇

卷之十 焦土

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

05 淹滞篇

卷之十 焦土

073 前夜

074 真空のとき

075 それぞれの戦争

076 降伏調印

077 占領

078 G H Q

073 前夜

第七十三

前夜

一

八月十四日の午前十時五十分、ポツダム宣言の無条件受諾が決まった。それは皇居内防空壕で開かれた御前会議においてであった——教科書日本史では、こういうことになっている。

解釈の次第によつては、日中戦争と太平洋戦争は第日本帝国の判断で終結したかに読めないこともない。降伏を「無条件受諾」、敗戦を「終戦」と言い換える可否はともあれ、日本政府がポツダム宣言を受け入れたので戦争が終わった、というのは、厳密には違っている。

争いごとというものは、一方が白旗を掲げただけでは終わらない。指揮官が発した「撃ち方止め」の号令一下、全軍が銃火を鎮めるのは中世的騎士道の世界ないし数十人の部隊の話であつて、近代戦争においては白旗もまた謀略の一つなのである。

まして双方が国力のすべてと数百万人の将兵を繰り出し

て、いま現在も広大な中国、インドシナ半島、太平洋の島々で展開している戦争を終結させるには、それなりの手続が必要だった。

日本政府中枢で「ポツダム宣言の無条件受諾」を最初に口にしたのは、外務大臣・東郷茂徳だった。彼はソ連を仲介役とする和平交渉に一縷の望みを託していた。その交渉には元首相・広田弘毅、元外務次官・天羽英二などが当たっていた。

両人ともソ連首脳と人脈を持ち、かつての上司と部下である。満州をめぐる日ソ間に複雑な事情が生じつつあったとき、阿吽の呼吸で緊密に連携したことがあつた。ただしこの二人については、

——ソ連が対日宣戦を布告する要因を作った。

とする批判も一部にある。

それが失敗した。モスクワ現地時間八月八日、ソ連が日ソ中立条約を破棄して対日宣戦布告を手交したのである。東郷は八月九日の深夜三時、至急電でそのことを知った。一刻の猶予も許されなかった。

彼は「無条件受諾の他に道なし」の考えを固め、白々と夜が明けるのを待つて首相邸のドアを叩いた。

このとき内閣総理大臣・鈴木貫太郎は、内閣書記長官・迫水久常から広島に投下されたのが原子爆弾であること、

九日午前零時を期してソ連が参戦したことを伝えられていた。

——何としても本土決戦を回避しなければならぬ。

という東郷の考えを聞いて、鈴木は言った。

「これは、この内閣で結末をつけましょう」

同日午前十時三十分、皇居内の地下防空壕で最高戦争指導者会議が開かれた。枢密院議長・平沼騏一郎が加わっていた。ここで初めて「戦争の終結」が議題になった。すなわちポツダム宣言の受諾如何である。

枢密院議長・平沼、外務大臣・東郷、海軍大臣・米内光政が賛成、陸軍大臣・阿南、参謀総長・梅津美治郎、軍令部総長・豊田副武が継続を主張し、首相鈴木は態度を保留した。このため意見がまとまらなかった。

午前十一時過ぎ、長崎に「新型爆弾」が投下された、という第一報が入った。

これを受けて鈴木は、午後一時から閣議を招集した。席上、鈴木は軍需大臣・豊田貞次郎、農商務大臣・石黒忠篤、運輸大臣・小日山直登などに、物資の面から戦争継続が可能かどうかを問いただした。

軍需産業は壊滅状態、農産物は生産が低迷し物資の輸送はほとんど止まっていた。改めて確認する必要もないことだった。立場上、戦争の継続を主張せざるを得ない陸相・

阿南への配慮であったであろう。

十日深夜午後零時過ぎ、皇居御文庫附属の防空壕で御前会議が開かれた。最高戦争指導者会議の六人と枢密院議長・平沼、このほか陸・海両省事務局長、内閣書記長官・迫水久常、内閣総合計画局長・池田純久の四人が陪席した。時計の針が十日に進んでも意見は三対三のまま動かなかった。首相・鈴木はここでも意見を示さなかった。

二

ポツダム宣言の受諾如何をめぐる政府・軍部首脳の会議が長引いているさなか、満州や樺太では阿鼻叫喚の地獄絵図さながらの光景が繰り広げられていた。ソ連政府が対日宣戦を布告した直後、九日午前零時を期して満州と樺太にソ連軍機械化部隊が進攻した。このときの勢力は戦車五千輛、航空機五千機、火炮二万四千門、兵員百七十四万以上の規模だったとされる。

日本の関東軍は南方へ兵力の過半数を引き抜かれていた。このため陸軍参謀本部は急遽、中国戦線から四個師団を派遣して七十四万人の兵力をこれに当てた。ところがソ連軍機械化部隊に対抗するには、関東軍の装備はあまりにもお粗末だった。

機械兵器は短砲で装甲が薄い旧式戦車が二百輛、航空機は二百機、火砲は一十門に過ぎず、砲弾はすべてをかき集めても千二百発しかなかった。精銳師団と重砲師団を南方に転出させたため、関東軍を構成する兵員の半数以上は三十代後半の新徴兵だったし、銃を持たない兵士（事務方や整備・補給班）が十万人もいた。

もはや戦いにならなかった。

関東軍作戦司令部ははじめ戦車部隊を突撃させたが、いとも簡単に沈黙させられてしまった。ソ連軍戦車が撃ちだす砲弾一発で日本軍の戦車は宙に舞った。そこで兵士が地雷や爆弾を抱えてソ連軍戦車に突入・自爆する肉弾戦を展開した。本土からの増援部隊が到着するまで、血と肉の代償をもって時間をかせごうとしたのである。

彼らがこのような無為な作戦を講じたのは、八月十日に発せられた陸軍大臣布告によつていた。

全軍將兵ニ告ク、「ソ聯」遂ニ皇國ニ寇ス、明分如何ニ粉飾スト雖モ大東亞ヲ侵掠制覇セントスル野望歴然タリ、事茲に至る、又何ヲカ言ハン、斷乎神州護持ノ聖戰ヲ戦ヒ拔カンノミ。

假令、草ヲ喰ミ土ヲ嚙リ野ニ伏ストモ斷シテ戦フトコロ死中自ラ活アルヲ信ス、是即チ七生報國「我一人生きテ

アリセハ」テフ楠公救國ノ精神ナルト共ニ、時宗ノ「莫煩惱」「鶯直進前」以テ醜敵ヲ撃滅セル鬪魂ナリ、全國將兵宜シク一人ヲ餘サス楠公精神ヲ具現スヘシ、而シテ又時宗ノ鬪魂ヲ再現シテ驕敵撃滅ニ鶯直進前スヘシ。

それは空しい布告だった。近代兵器の前に楠正成、北條時宗が何の役に立つというのか。

この布告を発したとき、陸軍參謀本部と海軍軍令部は満州国の放棄を決定していたのだった。援軍を送ろうにも本土決戦のための兵を割くことはならず、物資もなく、輸送船もなかった。アツツ、キスカ、サイパン、ブーゲンビルと同じだった。

ソ連軍は怒濤の勢いで南下しつつあった。

三

八月十日午前三時過ぎ、鈴木首相が

「只今お聞きの通りでございます。何とぞ思し召しをお聞かせ下さいませ」

と発言し、天皇が

「自分の意見は、外務大臣の意見に同意である」と言った。

これによってポツダム宣言の無条件受諾が決定した。
引き続き開かれた閣議で問答があった。

切り出したのは陸相・阿南だった。

——米英が天皇の大権を認めなければ、どうなるのか。

この質問には二つの意味があった。

一つは「天皇の名において戦争を終結する」という超法規的手段を、連合軍政府が正規の外交手続きとして認めるかどうか、ということだった。もう一つは、ポツダム宣言受諾後も天皇制が容認されるか、である。

首相・鈴木はこのとき、

——いずれの場合であっても、そうなれば戦争は継続する。

と回答し、海相・米内も鈴木と同じ考えを示した。

この回答で阿南は沈黙した。

午前四時、全閣僚が必要な文書に署名した。中立国のスイス、スウェーデンに向けて、その意向が発信されたのは同日午前九時だった。

午前九時三十分、阿南は陸軍省地下の防空壕に同省各課の長を集め、無条件降伏の「聖断」が下ったことを伝えた。

「不服の者は、この阿南を斬れ」

と言ったのはこのときとも、八月十四日にクーデター派を説得したときとも二説があって定かではない。

陸軍参謀次長だった川邊虎四郎は、このときの心境を次のように日記に書いた。

・八月十日

ただ降参はしたくない。殺されても参ったとは言いたくないの感情あるのみ

・八月十一日

終日部屋に座りあり。気のぬけたビールかと自嘲するのがやつのこと

連合軍の回答がサンフランシスコ放送で流されたのは十日深夜（時計の上では十二日零時四十五分）だった。外務省、陸軍省、海軍省、同盟通信などがそれを傍受した。その中の

天皇および日本国政府は、連合軍司令官にサブジェクト・トゥー (Subject to) する

という文言が問題となった。

外務省は「Subject to」を「制限の下に置かれる」と解釈した。

これに対し、陸軍は「隷属する」と翻訳した。

一度は「已む無し」に傾いた陸軍の内部に、戦争継続の
声が再発した。

また、

日本国の最後の政治形態は、国民の自由に表現された意志
によるものとす

という条項に平沼騏一郎が態度を硬化させた。国民主権
という概念がなかった。

明けて十二日午前八時、外務大臣・東郷は宮中に参内し、
傍受したサンフランシスコ放送の内容を天皇に伝奏した。

二十分後、今度は陸軍参謀総長・梅津と海軍軍令部総
長・豊田が参内して、

「これを受諾するのは危険であると考える」

という旨を上奏した。

午前十一時、天皇から回答があった。

——先方の回答のままでよいと考える。ただちに応諾す
るように。

午後三時から開かれた緊急閣議では、国体（天皇制）護
持について連合国に再度照会すべしとする陸軍大臣・阿南
と、再照会には反対であるとする外務大臣・東郷の意見が

対立した。

——サンフランシスコ放送は連合国の正式回答ではない
のだから、再照会する必要はない。

という意見が通った。

十三日未明、スイスとスウェーデンから連合国政府の正
式回答がもたらされた。天皇制の存続を間接的に承認する
内容だったが、解釈に幅があった。午前九時から開かれた
最高戦争指導者会議でも、連合国の正式回答の解釈をめぐ
つて意見が対立した。

午後三時にいったん中断し、午後四時から閣議が持たれ
た。ここでも「応諾」の結論は出なかった。

この日は終日にわたって、アメリカ機動部隊の爆撃機と
戦闘機が東京と関東地方に飛来して激しい攻撃を行った。

その数七百六十機。

——否か応か。

回答を迫るものだったろう。

四

——このままでは、いつまで経っても「応諾」の回答は
出まい。

と考えたのは、内閣書記長官の迫水だった。十三日午後

の時点で、すでに陸軍の一部強硬派に不穏な動きがあった。彼を動かしたのは、深夜に入って朝日新聞の記者が問い合わせてきたことだった。

「このような内容の号外を出せと大本営が言ってきたが、承知しているか」

とその記者は言った。

「何のことか」

迫水が問うと、記者は折りたたんだガリ版刷りの藁半紙をポケットから出して示した。それは明日の朝刊に載せるよう、新聞社に配られた記事原稿用の資料だった。

そこには

皇軍は新に勅命を拝し米・英・ソ・支の四ヶ国連合軍に対し、新なる作戦行動を開始せり

とあった。

迫水はその場で受話器を取った。

陸相・阿南と参謀総長・梅津に確認すると、二人はともに「知らない」という返事だった。

陸軍情報部が内閣を無視して勝手な行動を起こそうとしていた。陸軍参謀本部の佐官級士官グループが動いているのに違いなかった。ここでイタリヤのように内戦状態が発

生すれば、連合国軍とソ連軍は自儘に日本本土を蹂躪するであろう。

迫水は東久邇宮がソ連の軍事力をアメリカ、イギリスの抑止力に利用するため、工作を行っていることを承知していた。そして彼はソ連に下ることだけは避けなければならぬと考えていた。

ソ連軍が本土に迫る前に、アメリカの合意を取り付けなければならぬ。

そこで迫水は深夜にもかかわらず首相・鈴木に相談した。何か手を打たなければポツダム宣言受諾の閣議決定が無効になってしまう。

鈴木はしばらく黙考し、

——天皇のお召し。

という言葉を口にした。

超法規の非常措置である。

翌十四日午前十時半、天皇が改めて「ポツダム宣言受諾」を明示した。『聖断』にはこのような経緯があった。

この裏側で、軍部による皇統護持作戦が動いていた。

一つは陸軍の中野学校出身者たちだった。天皇の身邊に最悪の事態があれば決起してアメリカ将校を暗殺し、伏見宮家を推戴して皇統を護持する全国的な地下組織を編成する準備を進めていた。

立案したのは少佐・猪俣甚弥で、参謀本部課長の大佐・白木末成が同意して「占領軍監視地下組織計画書」を策定した。これに従って猪俣は当時八歳の北白川宮道久王の偽戸籍を作り、新潟県六日周辺に隠れ家を探したが天皇制の継続を見届けたのち新津で逮捕された。

もう一つは海軍軍令部だった。中野学校にやや遅れて計画が策定され、八月十七日、軍令部部長・富岡定俊少将から源田實に指示が出された。源田は長崎県大村飛行場に飛んで紫電改部隊の精鋭から二十三人を選び、皇族を匿って皇統を守る作戦を伝えた。

対象としたのは陸軍と同じく北白川宮道久王、秘匿場所は最初は五家荘、のち宮崎県の杉安（西都市）が候補となった。この作戦も天皇制の継続で沙汰止みとなったが、源田が同志を東郷神社和楽殿に集めて作戦の終了を告げたのは一九八一年一月七日だった。

北白川宮道久王はのち皇室を離脱して「北白川道久」と名乗った。一九六〇年学習院大学を出て東京芝浦電気に入り、東芝国際交流財団専務、のち伊勢神宮大宮司、神社本庁統理などを務め、二〇一八年に没した。

補注

東郷茂徳 とうこう・しげのり／1882～1950。第五十七「駆け引き」補注

広田弘毅 ひろた・こうき／1878～1948。福岡県に生まれ、外交官として北京(中国)、ロンドン(イギリス)、ワシントン(アメリカ合衆国)、ハーグ(オランダ)、モスクワ(ソ連)などを転任した。一九三三年齋藤実内閣、三四岡田啓介内閣で外務大臣、三六年自身の内閣で外務大臣を兼務した。三七年第一次近衛文磨内閣で外務大臣に起用され、第二次大戦中は貴族院議員、内閣参与を務めた。A級戦犯として逮捕され、極東軍事裁判で死刑判決を受けた。

天羽英二 あもう・えいじ／1887～1968。徳島県に生まれ一九二二年東京高等商業(のち一橋大学)を出て外務省に入った。広東、ハルビン総領事のち在モスクワ日本大使館参事官となり三三年広田弘毅外相の下で外務省情報部長。三九年イタリヤ大使のち四一年豊田貞次郎外相の下で外務次官、四三年情報局総裁。終戦後A級戦犯に指名されたが不起訴となった。東芝常務、日本サン・マイクロシステムズ社長・会長を務めた天羽浩平の父に当たる。

鈴木貞太郎 すずき・かんたろう／1868～1948。海軍次官、連合艦隊司令長官、海軍軍令部長などを歴任した。予備役編入後に待従長と枢密顧問官を兼任した。枢密院副議長、議長を務めたあと、小磯國昭の後任として第四十二代内閣総理大臣に就任した。江戸時代生まれの最後の総理大臣。日本映画社製作の報道

映画『日本ニュース』戦後編第三十一号(一九四六年八月十五日付)で「われは敗軍の将である。ただいま郷里に帰って、畑を相手にいたして生活しております」と語った。

迫水久常 さこみず・ひさつね／1902～1977。鹿児島県に生まれ一九二六年東京帝国大学を出て大蔵省に入った。岡田啓介の娘と結婚してその秘書官となり、四一年企画院に出向した。

鈴木貞太郎内閣で内閣書記官長兼総合計画局長官として終戦工作に尽力した。五二年衆院議員、のち参院に転じ第一次・二次池田勇人内閣で経済企画庁長官を務めた。

平沼騏一郎 ひらぬま・きいちろう／1867～1952。第五十三「大陸」補注

阿南惟幾 あなみ・これちか／1887～1945。東京に生まれ一九一八年陸軍士官学校を出た。二二年サハリン州派遣軍参謀、二九年侍従武官、三三年歩兵第二連隊長、三六年陸軍省兵務局長、三七年人事局長、三八年第一〇九師団長、三九年陸軍省次官、四三年大将に進み四五年陸相。統制派と皇道派の派閥争いに際して「軍人は政治に口出しすべきではない」という信念で中立を維持した。東条英機の後任首相に推す声もあった。侍従武官のとき侍従長だった鈴木貞太郎と知り合い、「軍人は政治に関わるべきではない」を学ぶとともに鈴木に心酔したといわれる。

梅津美治郎 うめづ・よしじろう／1882～1949。大分県に生まれ陸軍士官学校十五期、のち陸軍大学校を出てドイツ、デンマーク、スイスなどに駐在した。二八年陸軍省軍務課長、歩兵第一旅団長、参謀本部総務部長などを経て三四年支那駐屯軍司令官、三三六年陸軍次官、三八年第一軍司令官、三九年関東軍司令官、四〇年大将に進み四四年参謀総長。終戦後A級戦犯として逮捕、

終身刑を受け獄中で病死した。

豊田副武 とよだ・そえむ／1885～1957。大分県に生まれ海軍大学校卒業後一九一九年からイギリスに駐在した。三三年連合艦隊参謀長、第四・第二艦隊司令官を経て四一年大将に進み、連合艦隊司令官。終戦時は海軍総隊長官、軍令部総長。

豊田貞次郎 とよだ・ていじろう／1885～1961。第五十六「東亜新秩序」補注

石黒忠篤 いしぐろ・ただあつ／1884～1960。東京に生まれ一九〇八年東京帝国大学を出て農商務省に入った。三一年農林次官、四〇年第二次近衛文麿内閣で農林相、四五年鈴木貫太郎内閣で農商相。五二年参院議員となり一貫して農政にかかわった。**小日山直登** こひやま・なおと／1886～1949。福島県に生まれ一九一二年東京帝国大学を出て南満州鉄道に入った。三七年昭和製鋼所社長、三八年満州重工業開発理事を兼務し四三年満鉄総裁に就任した。鈴木貫太郎内閣で運輸通信相、のち運輸相となり東久邇内閣でも運輸相を務めた。

皇居御文庫附属の防空壕 正確には「御文庫附属庫」といった。地下十メートルにあって、十五坪ほどの部屋だった。天皇・皇后の寝室・居間から地下道でつながっていた。

関東軍七十四万人 このなかには居留民十五万人、在郷軍人二十五万人が含まれていた。制式の陸軍兵は三十五万人に過ぎず、平時時は非戦闘員であったはずの民間人が戦いに参加したことが、満州の悲劇を広げていく。

旧式戦車 九八式軽戦車、九五式軽戦車等の軽戦車で、砲身が短いため砲弾が敵陣に届かず破壊力が弱かった。また装甲が薄く軟弱だったため、敵の砲撃にあうと簡単に破壊された。日本陸軍に

おいての戦車は歩兵部隊の進撃を支援する補助的な役割しか与えられていなかった。

川邊虎四郎 かわべ・とらしろう1890～1960。富山県に生まれ、陸軍士官学校二十四期生、のち陸軍大学校を出た。ソ連、ポーランド駐在武官として海外事情に明る買った。関東軍の設置に尽力したが満州事変を境に関東軍と対立、日中戦争に關しては不拡大を主張した。参謀本部戦争指導課長、防衛相参謀長、航空本部総務部長、第二飛行師団長、第二航空軍司令官、参謀次長などを歴任した。対米戦争に消極的、批判的だったために中将までしか昇進できなかった。終戦時、大本営全権代表となり、その後は連合軍総司令部歴史課に属した。

猪俣甚弥 いのまた・じんや／1916～..最終階級は陸軍少佐だった。

富岡定俊 とみおか・さだとし／1897～1970。最終階級は海軍少将。戦艦「大和」の海上特攻（沖繩本島の岸辺に突入・着底させて砲台とする）作戦に反対した。一九四五年九月二日の降伏文書調印式に随員として参加した。

074 真空のとき

第七十四

真空のとき

一

八月十四日、午前十時半から全閣僚、枢密院議長・平沼騏一郎、参謀総長・梅津美治郎、軍令部総長・豊田副武、書記官長・迫水久常、内閣総合計画局長官・池田純久、陸海軍省軍務局長ら二十三名を前に、天皇が改めて「ポツダム宣言受諾」の「聖断」を下した。

以後、以下の手続きが行われた。

・午後一時から閣議。ポツダム宣言受諾の確認と終戦詔勅案の審議。

・ただちにNHKの幹部が召集され、玉音放送の方法を検討。

・午後八時、詔勅草案完成。

・午後八時三十分、天皇自ら詔書に御名御璽。

・午後九時、十五日正午に重大放送が行われる旨の予告ラジオ放送。

・午後十時、詔書に大臣の副署完了。

・同時にポツダム宣言正式受諾をスイス、スウェーデンへ打電。

・午後十一時半から天皇の詔勅録音。

時系列に整理すると、詔勅の録音は自然な事務手続きとして行われたように見える。

だが、天皇自らが詔書を読み上げ、それをレコードに録音してラジオで国民に放送するという方法は、にわかに決定されたものではなかった。実際のところは、情報局総裁・下村宏が八月八日、天皇と面会して進言したとされている。

これが事実とすれば、ポツダム宣言受諾の方針は政府部内でそれ以前に固まっていた、下準備が進められていた可能性がある。八月八日からの七日間は、「国体」すなわち天皇制護持の方策と、戦争の継続を訴える陸海青年将校の説得策を検討することに当てられたわけだった。

ようやくにして官僚たちは、ポツダム宣言無条件受諾に向けて動き出した。

NHKラジオ放送で天皇の肉声による戦争終結の知らせが国民に発せられるまで、皇居を中心とする一角には緊張が覆っていた。

史上、一九四五年八月十四日深夜から十五日早朝にかけての出来事については、多くの体験や見聞が残されているので、ここでは「八・一五」の概略を書くにとどめる。

八月十四日、陸軍大臣・阿南惟幾が公邸に戻ったのは午後一時半過ぎだった。公邸には、夫人の実弟である陸軍参謀・竹下正彦（中佐）が待っていた。戦争継続を唱える決起派将校の一人である。

竹下は懸命に阿南を説得した。

——陸相が決意し、近衛師団が動けば東部軍が決起するに違いありません。

——日光に疎開している皇太子を立てて国体護持の本土決戦を断行すべきではありません。

と竹下は言った。

その義弟に阿南は

「自分が立つても、東部軍は動かないよ」

と答えた、といわれる。

竹下はなおも公邸にとどまり、食い下がった。

午後十一時過ぎ、皇居御文庫衛兵（近衛師団第二大隊第五中隊）の児玉金作（中尉）は、師団長・森赳が前触れもなく単身で巡回に来たことに、わずかに不審に感じた。

児玉の証言によると、森は

「しっかりお護りせよ」

と声をかけ、御文庫に向かつて拳手の礼をして去っていた。

児玉は御文庫の中で何が行われているか、薄々は感じていたが、このとき皇居内の別の場所で戦争継続を主張する将校たちがクーデターを起こしつつあることまでは知らなかった。

その二時間後、森はクーデター派の畑中健二（少佐）に殺害される。

陸軍参謀の職にあった古賀秀正（少佐）らは偽の命令書を発令して師団を動かす画策を行う一方、午前四時過ぎ、畑中、同腹の井田正孝（中佐）が最後の頼みの綱である陸軍大臣・阿南の決起を促すべく公邸を訪れた。だが竹下の表情を見て畑中、井田は陸相説得が不首尾に終わったことを知った。

十五日午前四時四十分、阿南は「一死を以て大罪を謝し奉る。神州不滅を確信しつつ」と遺書して大臣室で切腹した。竹下が介錯した。死亡確認は同日午後七時十分である。享年五十八。

畑中と井田は陸軍大臣公邸から取って返し、詔書の録音レコードを奪うべく工作を開始した。録音作業を行ったNHKの技術者たちは宮中から出るとき厳しい検問を受けた。彼らは録音盤を持っていなかった。

——宮中のどこかにある。

と判断した畑中と井田は侍従・徳川義寛に

——録音盤をお渡し願いたい。

と迫ったが、「知らぬ」の一点張りだった。

侍従の頬に鉄拳が飛んだ。それでもこの侍従は口を割らなかつた。この間に正副の録音盤二枚が高松宮の手を経てNHK放送局に運び込まれた——というのだが、この話にはもうひとつ尾鱈がある。

録音盤は十五日早朝まで、畑中らが占拠した宮内庁の一室のロッカーの中に入っていた。職員の私物を雑然と詰め込んだ雑納袋に録音盤は隠されていた。天皇の肉声を録音したレコード盤がそのような場所にあるとは、クーデター一派は考えもしなかつた。

ともあれクーデター一派は東部軍司令部の同調が得られず、終戦の詔勅を録音したレコード盤の奪取にも失敗した。十五日早朝、東部軍司令官・田中静彦（大将）が自ら皇居に乗り込んで近衛師団の諸部隊を帰還させた。ために企みは潰えた。

畑中はなおもあきらめず、NHK放送局を占拠してラジオ放送で国民に決起を呼びかけるを試みたが、これも成功しなかつた。次いで椎崎二郎（中佐）とともに宮城周辺で徹底交戦を記した檄文を撒布した。

玉音放送直前の十一時二十分、椎崎と畑中は二重橋と坂下門の中間の松林に正座し、畑中は拳銃で額を撃ちぬいた。椎崎は軍刀を腹部に突きさし、さらに拳銃で頭部を打ち抜いて自決した。彼らの慰霊碑は、東京・浜松町にほど近い青松寺にある。

二

第五航空艦隊司令長官の宇垣纏（中将）は、鹿児島県鹿屋基地にいた。彼は八月十四日、連合艦隊司令長官小澤治三郎中將から「対ソ及対沖繩積極攻撃中止」の命令を受けていた。また宇垣は戦略指導の観点からアメリカのサンフランシスコ放送を聞いていたので、日本がポツダム宣言を正式に受諾したことを承知していた。

十五日、正午に流された天皇の肉声による詔勅朗読を確認した宇垣は、その日記『戦漢録』に

多数殉忠の将士の跡を追い特攻の精神に生きんとするに於いて考慮の余地なし。顧みれば大命を拝してより茲に六月、直接の麾下及指揮下各部隊の決戦努力に就いては今更呶々を要せず、指揮官として誠に感謝の外無し

と記した。

すでに覚悟を定めていた彼は軍装の襟から階級章を外し、艦上爆撃機「彗星」に乗り組んだ。これに十機の「彗星」が従った。離陸したのは午後四時ごろと伝えられる。午後七時三十分、機上より打電

本戦ハ部隊員が桜花ト散リシ沖繩ニ進ミ
皇国武人ノ本領ヲ發揮シ驕敵米艦ニ突入撃沈ス

宇垣中将機を含む八機が未帰還となった。アメリカ軍側によると、八月十五日午後八時過ぎ、沖繩の本部伊平屋島にあったアメリカ軍兵站地に突入・自爆した「彗星」二機が記録されている。享年五十五。

特攻攻撃を決定した軍令部次長の大西瀧治郎（中将）は十六日未明、割腹して自殺した。

遺書にいわく、

特攻隊の英霊に曰す、善く戦ひたり、深謝す、最後の勝利を信じつゝ、肉弾として散華せり

然れどもその信念は、遂に達成しえざるにいたり、吾死を以て旧部下の英霊と遺族に謝せむとす

彼が特攻作戦を思いついたのは、真珠湾奇襲攻撃のとき、被弾したために帰還を断念した飯田房太郎（大尉）が、アメリカ軍基地の兵器庫に突っ込んで自爆したことがヒントになった。享年五十四。

宮城事件と同じ動きは水戸に本部を置いていた水戸教導航空通信師団でも起こった。

十七日早朝、同師団に所属する約四百人が青森発上野行き列車を乗っ取って東京に進軍したが、近衛第二師団のクーデターが失敗していたことを知って戦意を喪失した。

また厚木飛行場の三〇二航空隊が断固決戦を主張し、小園安名（大佐）の名で

「連合艦隊指揮下より離脱する」

と宣言して首都上空からビラを撒いた。

彼らは彗星や天山に飛行兵二名、三名が搭乗して全国の飛行基地に降り立ち、檄を飛ばすとともに同乗の一名が別の戦闘機一機、二機を操縦して帰還するということを繰り返した。その結果、厚木基地には型式の異なる様々な戦闘機や爆撃機が集結し、決戦が可能な機数が整った。

ところがマラリアの持病を持っていた小園大佐が高熱を発して病院に移され、また天皇の弟である高松宮宣仁がこ

れを知って、自ら基地航空隊飛行長・山田九七郎（少佐）に電話をして兵たちを説得せしめた。同基地が武装解除されたのは八月二十一日である。

台湾の日本軍基地では、八月十五日に出撃する予定の特攻機五十機が滑走路に並んでいた。同日、酒保が開かれ隊員たちがうかれ騒いでいるうちに、基地司令が全機のプロペラを外してしまった。飛行服を隠し、隊員を諦めさせた陸軍航空基地もあった。

ともあれ、満州事変から数えて十五年に及ぶ戦争に、こうして終止符が打たれていった。

三

第三機動部隊の艦載機と厚木基地の日本軍機が最後の空中戦を戦っているさなか、日本時間八月十五日午前八時四分、サンフランシスコ放送が

「日本がポツダム宣言の無条件受諾に同意した」

と伝えた。この放送は超短波で流され、太平洋全域に展開するアメリカ軍やオーストラリア軍は発砲を停止した。ハルゼーが太平洋艦隊司令長官ニミッツから戦闘停止命令を受けたのは、その二時間五十一分のち、午前十時五十五分だった。彼はただちに第一次攻撃隊と、続いて発艦して

東京に向かいつつあった第二次攻撃隊に

「全機、帰投せよ」

と発信した。

これが第二次大戦の最後の戦闘命令となった。

彼は、日本本土上陸作戦が実行に移されずに済んだことを神に感謝した。

折り返し編隊のリーダーから

「日本軍機が追撃してきたら、どのようにすればいいか」という質問があった。

ニミッツは言った。

「友好的に対応しろ」

攻撃機はその意味を理解し、抱えていた爆弾を次々に海に投下し始めた。

麾下の全艦船が、一斉に汽笛とサイレンを鳴らし、将兵はホイッスルを吹いた。ホイッスルは攻撃機の発艦や敵機の襲来を知らせる合図だったが、このときのそれは違っていた。

ほぼ同時刻、マニラの南西太平洋司令部にいたマッカーサーは、ワシントンから

「貴官を合衆国陸軍元帥に任じ、併せて日本占領の連合国軍総司令官に任ずる」

という電報を受領した。

当日は北海道の一部を除いて、全国的に快晴だった。正午から「重大放送」があるということが、前もって国民に知らされていた。首都・東京の上空には真夏の青空が広がり、アメリカ軍機は一機たりとも姿を見せなかった。

正午の時報のあと、やや甲高くか細い声が流れてきた。雑音がひどく、

「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び……」

という部分しか聞き取れなかった。多くの人の感想は「難しくて、よく分からなかった」というのが実際だった。

肩を震わせ、唇を噛みしめ、あるいは拳を堅く握ってこらえ泣く人が何人かいた。そういう人々の姿から、多くの国民は「戦争に負けた」ということを理解した。

油蟬の声ばかりが聞こえていた。

日本中の時が止まった。真空のときが訪れた。

同日を以って鈴木貫太郎内閣は総辞職し、十六日午後四時、日本の陸海軍に停戦の指令が出た。

その知らせは無線で満州、中国、インドシナ、ビルマ、フィリピン、ミンダナオ、太平洋諸島に向けて発信され、各地に配属されていたハム愛好家の兵士が自作の機械で受信して全隊に知らせたケースもあった。

だが、この知らせは沖縄の洞窟に立て籠もっていた兵士や市民には届かなかった。アメリカ軍は日本の降伏を知らせるビラを空から撒いたが、第二十四師団の歩兵第三十二聯隊、第一大隊はこれを信用しなかった。

実際、十八日になってもアメリカ軍は「馬乗り」で市民が立て籠もる国吉大地の洞窟に手榴弾を放り入れ、火炎放射器で焼き、逃げ出してくる人影を機銃で撃ちまくった。

二十二日に至って日本語が達者な将校がスピーカーで日本の降伏を知らせ、二十三日、第一大隊の伊東孝一大尉が「軍使」としてアメリカ軍陣地に赴いて事実を確認した。

第三十二聯隊と第一大隊が武装解除に応じたのは二十九日だった。同じく第二十四師団の第二大隊も、降伏を知らずに抗戦を続けていた。この部隊の説得に当たったのは第一大隊の伊東孝一大尉である。

九月四日、第二大隊の武装解除をもって沖縄戦は終結した。

八月十七日、皇族の東久邇宮稔彦が組閣した。同日、満州では皇帝・溥儀が退位し、満州国が消滅した。朝鮮では日本総督府が解体し、呂運亨などによる独自政府樹立の動きが始まった。十八日には上海、広州、天津、青島などにアメリカ軍が上陸し、混乱の収拾に当たった。

~~~~~ 補注 ~~~~~

下村 宏 しもむら・ひろし／1875～1957。和歌山県出身で東京帝国大学から通信省に入り、一九一五年台湾総督府民政長官、総務長官を務めた。二二年朝日新聞社に移って専務、副社長、三七年貴族院議員を経て四三年日本放送協会会長に就任した。「人種改良を国策に」「障害者や犯罪者は断種すべき」と主張し四〇年「国民優生法」を成立させた。

竹下正彦 たけした・まさひこ／1908～1989。陸軍士官学校四十二期。終戦時、陸軍省軍務課内務班長・中佐。のち自衛隊に入り陸将、陸上自衛隊幹部学校校長となった。父・竹下平作は陸軍中将、兄・宣彦は陸軍中佐、弟・光彦は陸軍中佐、姉・綾子は陸軍大臣。阿南惟幾に嫁ぐという陸軍エリート一家だった。

森 越 もり・たけし／1894～1945。高知県に生まれ一九一六年陸軍士官学校、のち陸軍大学校を出て三二年関東軍参謀、三三年騎兵学校長、三七年第一軍参謀、四二年第六軍参謀長、四三年憲兵司令本部部長、四五年中将に進み近衛師団長。ニックネームは「和尚さん」だった。

畑中健二 はたなか・けんじ／1912～1945。陸軍士官学校四十六期。終戦時陸軍軍務局員・少佐。純朴で物静かな文学青年といった印象だったという。

古賀秀正 こが・ひでまさ／1919～1945。陸軍士官学校五十二期。終戦時少佐。森師団長殺害後、偽の師団長命令を作成した。

井田正孝 いだ・まさたか／1912～2004。陸軍士官学校

四十五期。同期に椎崎二郎(ともに終戦時中佐)がいた。所論「戦争遂行の可能性」(松谷誠「大東亜戦争収拾の真相」芙蓉書房)がある。

終戦詔勅録音盤 NHKの技術陣は万一のことを考えて録音盤を三枚、同時に作成した。一枚は正盤として放送に使われたあと破壊され破棄、副盤一枚は現在もNHKのどこかに保管されている。残る副盤一枚の行方は現在も知れない。

椎崎二郎 しいざき・じろう／1911～1945。自決に臨んでしたためた遺書は「至誠通神」だった。

宇垣 纏 うがき・まとむ／1890～1945。岡山県に生まれ一九一二年海軍兵学校卒、二四年海軍大学校を出て二八年ドイツ駐在ののち連合艦隊参謀、四一年第八艦隊司令長官、同年連合艦隊参謀長として山本五十六を補佐した。四三年四月山本五十六座乗機撃墜のとき座乗した二番機が撃墜されゲリラの捕虜となった。のち救出され四四年第一艦隊司令官、四五年第五航空隊司令長官となり、同年八月十五日沖縄方面に出撃して戦死したとされる。

大西瀧治郎 第五十八「誤認」補注

小園安名 おぞの・やすな／1902～1960。海軍台南海軍航空隊副長(中佐)のとき、零戦パイロットを訓練した。また第二五一航空隊司令(大佐)としてアメリカ軍の重爆撃機を撃墜する「斜め銃射撃法」を編み出すなど創意工夫の持ち主だった。終戦時は厚木基地三〇二航空隊司令。台湾航空隊、ラバウル航空隊の部隊長として赴任中にマラリアを患い、それが持病となっていた。

伊東孝一 いたう・こういち／1921～…大尉の位だったが



上官が戦死したため先任将校として第一大隊長の職務にあった。著書『沖繩陸戦の命運』（非売品）がある。H U F F P O S T「沖繩戦で生き残った男が「封印」した356通の手紙。時空を超え、若者たちが遺族に届ける」参照。

**東久邇稔彦** ひがしくに・なるひこ／1887～1990。明治天皇の没後、健康状態が思わしくなかった大正天皇の後継者問題に関連して、父親の久邇宮朝彦が長く広島に幽閉に近い状態で隔離されていた。そのこともあって、皇族ながら反体制的な気骨を持つていた。第二次大戦後の東西冷戦をいち早く見抜いていたといわれる。著書に『「皇族の戦争日記」（一九五七）などがある。

**皇帝・溥儀** ふぎ／正しくは愛新覚羅溥儀／Aixinjueluo Puyi／1906～1967。清朝第十一代光緒帝の弟・醇親王の子として北京に生まれ、〇八年西太后の推薦で三歳で皇帝に即位し「宣統帝」と称した。辛亥革命の翌年退位したが紫禁城で生活することが許された。しかし、馮玉祥のクーデターから逃れるために天津の日本租界に移った。三二年、日本政府の後押しで満州国が成立すると執政に就任、三四年皇帝の座に就き「康德帝」となった。四五年八月ソ連軍に逮捕されたが五〇年中国に身柄を移され五九年特赦、のち六四年政治協商会議全国委員に選出された。

**呂運亨** ヨ・ウンヨン（りょ・うんこう）／1886～1947。

第一次世界大戦が勃発した一九一四年、中国に亡命して上海に樹立された亡命政権「大韓民国臨時政府」に参加した。三三年「朝鮮中央日報」社の社長となって朝鮮の若者に向けて「日本軍に志願するべきである」など親日的な発言をしていたとされるが、否定する向きもある。一九四五年八月十五日、日本の朝鮮総督府からポツダム宣言無条件受諾後の混乱を抑えるよう依頼され、朝鮮

建国準備委員会を立ち上げた。九月六日付で「朝鮮人民共和国」の樹立を宣言したが、五日後、アメリカ軍政庁が設置されて瓦解した。

## 075 それぞれの戦争

第七十五

それぞれの戦争

一

第二次大戦の前にもインターネットが存在した——といえは、誰もが「そんなバカな」というに違いない。

インターネットの前身は、第二次大戦後、対ソ核戦争を意識したアメリカ合衆国で誕生した「ARPANET」である。一九九〇年代に入ってその技術が民間に開放され、こんにちの社会インフラになった。

だが、不特定多数の人が個々の識別コードを持ち、国境を超えて、互いに自由な情報の交換を行った、という点では、インターネットと同じ機能を備えていた。いや、情報の伝達がワイヤレスで、しかも音声で行われたという点で、インターネット以上であったかもしれない。

それは何かというと、無線電話、つまり「ハム」であった。

無線通信は一八九五年（明治二十八）にイタリアのグリエルモ・マルコーニが開発した。

当初はモールス信号と同じく、「ツー・トン」の電気符号だった。これを音声通信に変えたのは、日本の通信省電気試験所に勤務していた鳥潟右一、横山英太郎、北村政次郎の三人の技術者である。

一九一二年（大正一）にその技術を開発し、二年後に船舶との交信に実用化した。原理はラジオ放送と同じだった。不特定多数を相手にした片方向の電波をラジオと言い、特定個人の間で交信された双方向の電波を無線電話と呼んだ。ラジオ放送の試験電波が発せられたのは一九二四年（大正十三）一月、公に認知されたのは「放送無線電話に関する規則」の公布によっている。それを機に同年一月に大阪朝日新聞社が関西で、四月に東京朝日新聞社が首都圏で、さらに五月に大阪毎日新聞社が無線電話の公開実験を行った。

政府は国防の観点から電波管理を徹底しようとしたが、東京や大阪の学生、若手の電気技術者などが無許可で自前の局を開設し、勝手に電波を発信し始めた。アマチュア無線が始まったときだった。この中に、のちのソニーの井深大、NHK中央研究所長・島茂雄などがいる。

一九二七年（昭和二）九月、通信省は「短波私設無線電信電話実験局」の名称で全国のアマチュア無線九局を認可し、ワシントン条約に調印した二八年を境に積極的に無線

通信技術者を育てようとした。外洋航路や遠洋漁業の船舶との交信を円滑に行う必要性が生じたためだった。

満州事変を契機に、政府はアマチュア無線家を国防に役立てるべく、「国防無線隊」や「愛国無線隊」を発足させた。関東の「国防無線隊」の隊員は東京・赤坂の通信・電波兵器関係の部隊に一室を与えられ、軍用機器の修理、送信機・変調器などの製作、各地の通信所の整備、技術指導を行ったという。また各地で行われた防空演習に、毎年十五人から三十人が参加した。

その後、日米開戦とともにアマチュア無線は禁止され、個人所有の通信機は電波監理局職員の手で封印されていた。

「なにぶんの通知あるまで使用を禁止する」

と通信機に封印された人が大半だったが、無線機や部品を供出させられたり、また、買い上げられたケースもあった。最初のうち、政府はかなり高額で買い上げたりしたらしい。

無線電話愛好家たちの多くは、その技術を見込まれて研究開発や前線で働いている。

波長が合いさえすれば電波は遠く海外でも受信できる。

政府がどんなに情報を規制しようとしても、無線電話愛好家だけは海外の情報を肉声で入手していた。

大日本帝国政府は連合国に向けてポツダム宣言無条件受諾の電波を発信したのは、一九四五年八月十四日である。国内ばかりでなく、戦地にいた多くのハムたちが、手作りの無線装置でその電波を受信していた。

「日本がポツダム宣言を受諾した」

「戦争に負けた」

という情報は、彼らによって中国の荒野やジャングルの奥地の日本兵に伝えられていった。

## 二

日本アマチュア無線連合（JARL）が作成した資料に次のような逸話が載っている。

岡登博美は、一九四二年（昭和十七）一月に近衛輜重隊に入隊し、二月に北支に出征、終戦時は赤道直下のハルマヘラ島（インドネシア）にいた。

戦争末期となると

「電波の発射は危険ということで、無線機はもっぱら日本の海外放送を受信するだけだった」

「乾電池はたくさんあったが、補給路を絶たれたためにすぐに底をつき、手回し発電機を使った」

という。

また、八月十五日の玉音放送は

「聞き取れず、デマ放送（敵の放送）で終戦が華々しく伝わってきた」と書いてある。

と書いてある。

中島泰男は薬剤将校として旅順郊外の水師營の関東軍結核療養所に務めていた。勤務が終わると退屈なため、内地（日本）からラジオのキットを取り寄せて、炭火のハンダゴテで組み立てた。

「波長もいかげんであったが日本語が聞こえてきた」という。それは米国の日本向け放送「VOA」(Voice of America) だった。

「日本の大本営発表とまるつきり違う放送をひそかに毎晩楽しみに聞いていた。もちろん内容は外部に漏らさず、部屋を空けるときはラジオを隠して万全を期していた」

ある晩、放送を聞いていると隊長の少佐が入って来た。スイッチを切る暇がない。

「どうせデマ放送に決まっています」

という、その少佐は、

「そうではない。これは本当のことだ。日本はもう駄目かもしれない」

と言った。その後、しばしば訪ねてこられたので閉口したという。

石川舎人は中国・南京で地図伝送技術の開発を命じられた。現在のファクシミリである。前線を移動している部隊に位置を正しく知らせる必要があった。そのためには地図が伝送できれば便利である。

「電気のことには詳しくない」

というのが選ばれた理由だった。

当時、日本では画像伝送の技術に早稲田大学の「円板式」と浜松高工の「電気式」があることが知られていたが、戦地なので文献がない。南京市内を探し回ったり上海に探しに行ったりした。

「月刊ラジオニュースに、テレビジョンの基本回路図が掲載されていた。それを見つけて読んだところ、トランス類を自作すればいいことが分かった。真空管など部品入手の見当はついた」

と述懐している。

試作機が完成し、南京で実験した。

「山、川などの文字は一字三センチほどの大きさであれば送信できた。ところが、地図となると道路や等高線まで送れなければ意味がない。結局、地図を送受信するには

至らなかつた」

という。開発用の機材もなく、技術資料もなく、電子部品もない中でそこまで作り上げたというのは感心するほかない。

従軍記者となつて戦地に出掛けたハムもいた。

柴田俊生は朝日新聞社の社員として、日本光音工業で作られた無線伝送装置を羽田空港から漢口へ運んだ。途中飛行機の故障から船便に替えて漢口に着いたものの、漢口攻略戦は終了してしまつたため間に合わなかつた。しかも電源の同期が取れず、また、出力の不足で交信に失敗した。

同氏は道中、上海、南京で、漢口で多くのハム仲間と出会い、「前線JARRL大会」を開催した。

その中の国澤忠次郎は一九三七年から朝日新聞社の報道班員として中国に二年間駐在し、現地状況を刻一通信で伝送し続けた。

「北支（済南、徐州、開封）の戦闘から中支（武漢、南昌など）に五百キロ近い移動で大変な苦しみを味わつた」と記している。

住吉正元は読売新聞社の特派員として武漢三鎮攻略戦に従軍した。武漢三鎮攻略戦は一九三八年十月から始まり、

漢口、武昌、漢陽の三都市を攻撃する作戦だつた。

同氏は上海から長江を七百キロさかのぼつた江西省九江で、中支派遣軍大久保部隊の大久保一億大佐に面会した。同大佐は昭和八年に行われた「関東大演習」に参加した「愛国無線隊」の隊長を務めていた。住吉はその隊員、つまりともにハムを通じた知り合いという間柄だつた。

彼らは連合国軍の間でやり取りされる交信を傍受し、あるいは連合国軍が日本に向けて発信していた謀略放送を聴いた。大本営の発表は戦場の実態と大いに異なつていた。こうした人々によって、地下水脈のように、戦争の行く方を察知するのに必要な様々な情報が兵士たちに流れていった。

### 三

のちにITサービス産業にその名を残すことになる何人かについて、戦中の様子を描いておく。

松尾三郎という通信省の技官がいた。

一九一三年（大正二）盛岡の徳平家に生まれ、姫路の松尾家の養子に入った。一九三八年京都帝国大学の電気工学科を卒業して通信省に入った。入省した直後、志願して海

軍に入り、技術中尉として潜水艦乗りの訓練を受けた。志願したのは

「徴兵で軍隊に行くより、最初から尉官として赴任すれば上級兵に殴られずに済む」

と考えたためだった。それほどに軍隊の鉄拳制裁は恐怖だった。

佐世保基地で軍艦の検査官として過ごしたのち、通信省に復帰したが、日米開戦後、今度は徴兵されて一九四一年、ジャワ島のスラバヤに海軍工廠を建設する指導将校になった。オランダが持っていた工場を陸軍が接収し、これを海軍の艦船の修理工場に転換したものだ。

そこで陸軍の兵士がオランダの技術者を犯罪人同様に扱っていたことに腹を立て、

「敵といえども人間ではないか」

と真っ向から喧嘩を挑み、工廠の技術者として活躍の場を与えた。海軍の青年将校の剣幕に、さすがの陸軍もたじたじになった、というエピソードがある。

「潜水艦の訓練中、艦の機関が故障してあやうく死ぬところだった」

というようなこともあった。

ややあつて本国に戻され、レーダーの研究開発に従事することになった。研究所は千葉県九十九里浜にほど近い松

尾という町だった。現在の地図でいえば山武市松尾町である。

「バラック同然の施設だった」

とのちに語っている。

研究に没頭しているうち、終戦となった。

終戦時、海軍少佐。

戦後は通信省に戻って研究所に勤務し、一九五三年（昭和二十八年）に日本電信電話公社、五四年にニッポン放送技術次長、五七年に日本電波塔取締役技術部長などを経て、東京オリンピックが開かれた六四年に日本ビジネスオートメーション（JBA）の社長に就任した。

その後、縁あって北海道ビジネスオートメーション（HBA）、キウウェア・ソリューションズの前身である日本電子開発（NED）、SCC、日本宇宙開発などを設立するカタワラ、電子開発学園、北海道情報大学などを創設して人材の育成に当たった。

この人物については、稿を改めて書く。

戦地に赴いていた人もいた。

のちにセンチュリ リサーチ センター社長・会長、情報サービス産業協会会長を務めることになる高原友生は、一九四四年（昭和十九）陸軍士官学校を卒業し、歩兵第五

十八聯隊に配属された。祖父は陸軍軍人、父は海軍少将という軍人一家だったから、軍人になることには少しも抵抗がなかった。

歩兵第五十八聯隊はその年の二月に発令された「ウ」号作戦に参加している。「ウ」号作戦は、のちに「インパール作戦」の名で知られる。

作戦はビルマの国境を越えて、インド北東部の要衝インパールを占領してイギリス・インド連合軍による中国国民政府（国民政府は重慶にいた）支援ルートを遮断することになった。投入兵力は第十五軍三個師団、総員十二万人だった。司令官は盧溝橋事件を起こした牟田口廉也で、このとき中将に昇進している。

ビルマ方面の制空権は、すでにイギリスに握られていたし、第十五軍に与えられた航空機は二百機に満たなかった。牟田口は短期にインパールを陥落せしめるには、自動車中隊百五十、駄馬輜重兵中隊六十が必要と申請したが、大本営が送ってきたのは自動車中隊二十六、駄馬輜重兵中隊十四に過ぎなかった。

作戦の序盤は順調に進んだが、四月に入って進軍が停滞した。アメリカが機械化部隊二個師団を派遣して日本軍の前進を阻んだほか、イギリス空挺ゲリラ師団が日本軍の補給を妨害した。ために日本軍の三個師団は総崩れとなり、

飢えとマラリア、チフス、赤痢に侵された兵士たちは、折からの雨季のぬかるみの中で命を落としていく。作戦中止が決定されたとき、第十五軍三個師団の戦死者は三万五百二人、傷病四万九千九百七十八人を数え、事実上、壊滅状態にあった。

この作戦でからも生き残った高原は現地で抑留生活を送ったのち、日本に帰還したが職業軍人であったために就職ができなかった。そこで改めて東大に入り直し、伊藤忠商事に入った。

#### 四

そうした人物のうち、終戦時の軍隊における最高位だったのは、松尾三郎と並んで塚本祐造である。

彼は海軍横須賀基地の航空隊少佐として終戦を迎えた。実戦で零戦、雷電、紫電改に乗り、三菱重工業名古屋航空機製作所が開発中だった次期主力戦闘機「烈風」の試験パイロットを務めていた。終戦のときは首都防衛航空隊隊長を務めていた。

戦後、ようやく就職した野原産業が倒産し、金井元彦（のち参院議員）の紹介で伊藤忠商事に入った。航空機部品の輸出入に従事したのがきっかけとなって、アメリカの



ベンディックス社が開発した計算機「BENDIX G-15」の輸入と販売にかかわり、一九五八年、東京電子計算センターの設立にかかわった。のちのCRCソリューションズである。

終戦の年、陸軍航空隊の奉天航空基地に二人の飛行学生が配属されていた。のちに富士通名誉会長となった山本卓眞、インテックを創業した金岡幸二である。

二人は連日の猛特訓を受けていたが、四五年七月、ついに「特攻」を命じられた。出撃がいつになるか定まらないうち、八月七日、ソ連がにわかに対日参戦の意思を明らかにし、同日、怒涛の勢いで満州になだれ込んだ。

日本の関東軍の敗勢は明らかだった。

山本卓眞は、二〇〇二年春の防衛大学校卒業式の来賓祝辞でこう述べている。

私たちは、八月の敗戦直後、部隊長島田安也中佐から、内地への帰還命令と同時に生涯忘れ得ぬ訓示を受けました。それは「どんな事があっても行き抜け、生きて祖国の再建に力を尽くせ」というものでした。私達は汽車で送り帰され、部隊長他はシベリアに連れ去られました。

ただ別の説もあって、

——二人が日本に帰還したのは八月十三日、汽車ではなく奉天基地にあった最新鋭の戦闘機だった。という。

その戦闘機は「キ-84」だった、とまで伝わっている。

「キ-84」は別に「烈風」とも呼ばれている。

奉天の航空基地に配備されていたのは確からしい。

「奉天から列車で帰れるはずがない」と言われれば、否定する根拠はない。

だが、当人が「列車で」と言っているのだから、そうであるかもしれないし、そうではなかったのかもしれない。そのことははやどうでもいい。

吉澤審三郎の長男で、戦後、吉沢ビジネスマシンの社長となる吉澤幹夫は、終戦の直前、海軍が秘密裏に開発していた特殊潜航艇「回天」の乗組員として広島の高島で訓練を受けていた。

「回天」は船首に強力な爆薬を仕込み、人間が操縦して敵艦に体当たりする自爆兵器で「人間魚雷」とも称された。あと数日、戦争が長引いていたら、彼の戦後はあり得ようはずがなかった。

このときの縁で「回天」の設計者である松田武彦（のち

産能大学総長」と、戦後を一貫して親しく付き合った。

北川宗助の甥で、のちに日本ビジネスコンサルタント（NBC）大阪営業所長、日本情報開発（NID）取締役などを経てスタット社長となる北川淳治は、横浜ヨットという会社の銚子工場で勤労奉仕に駆り出されていた。

ここでは「マルヨン」（〇四）と呼ばれた特殊舟艇を作っていた。ベニアでできた全長五メートル強の船体に自動車用エンジンを二基取り付け、船首に爆雷を積んで敵艦船に突入する特攻艇である。「震洋」の名でボルネオやフィリピンの戦線に投入された。

石原寿夫（のち行政管理庁を経て情報処理振興事業協会理事、ソフトウェア流通促進センター所長）は東京帝国大学出の陸軍大尉として、パプアニューギニアのブーゲンビル島守備隊に配属されていた。もっぱら事務方を担当していた。

ブーゲンビル島といえば南洋の鮮やかな花「ブーゲンビリア」の発祥地だが、太平洋戦争時はその上空で山本五十六が撃墜されたことで知られる。かつ、当時は「ブーゲンビル」と呼ばれ、「墓島」とも呼ばれた。ここで四万二千人が戦病死した。

「打ち返す弾もなけりや鉄砲もないんだもの。戦争なんてできるわけがない。食糧がなくて、兵隊は立っているのが精一杯でした。へび、カエル、ネズミなんかはご馳走でね、トカゲとかミミズなんかも食べた」

「マラリアとアメーバ赤痢で次々に倒れる。食べてないから体力がない。便所に行けるうちはいい。行けなくなったら死ぬ。便所に行くふりをして抜け出し、ジャングルの中に入って手榴弾で自決する兵士もいました。分かっても、止めることができなかった」

取材後の雑談でそういう話を聞いたことがあった。

連合国軍との陸上の戦いは四三年十一月から始まり、四年七月に守備隊主力の独立混成第三十八旅団が事実上壊滅した。降伏したのはポツダム宣言受諾から九日後の八月二十四日だった。

「復員船に乗り込もうとしたとき、アメリカ軍から足止めを受けたんですよ」

と、後年、その体験を語っている。

「大学で法律を専攻していました。そのことが分かって、日本軍の戦犯の弁護を命じられたわけでした。そうはいっても弁護士の仕事はまったく経験がなかったので、「戸惑いました」

アメリカ軍は日本軍の戦犯逮捕者に弁護士を付けること

で、公平な裁判のかたちを作った。だが、勝者が敗者を裁くという本質はまったく変わらなかった。

石原はしばらくアメリカ軍大尉に準じる扱いを受け、帰国したのは四七年になってだった。

## 補注

グリエルモ・マルコーニ 第二十九「電信」補注

鳥潟右一 とりがた・ういち／1883～1923。秋田県花岡村の農家に生まれ第一高等学校（東京大学教養学部）、東京帝国大学工科大学電気工学科から通信省電気試験所に入った。一九二二年（明治四十五／大正一）横山英太郎、北村政治郎ともに、TYK無線電話機を発明し、実用無線電話を実現した。また一九一七年には無線による双方向通話に成功した。

横山英太郎 よこやま・えいたろう／1883～1966。福井県三国町に生まれ、第一高等学校、東京帝国大学から電気試験所に入った。のち日本無線、国際電気通信の役員を歴任した。

北村政次郎 きたむら・まさじろう／1882～1933。一九〇四年（明治三十七）電気試験所に入り、鳥潟右一の下で無線通信による音声通話技術の開発に従事した。一九一四年から一六年にかけて、三重県の鳥羽、神島、答志島の間を結んで実験を繰り返した。二五年東京放送局（のち日本放送協会）に移って技師長となった。

島 茂雄 しま・しげお／1906～1993。第二次大戦前にNHKに電気技術者として勤務、終戦直後、山梨県韭崎の山の中にあった軍の貯蔵庫から中・短波受発信機を無断で持ち出し放送網の再構築に取り掛かった。ソニーの井深大とはハムを通じて知り合いだった。無線通信網の再構築を一緒に進めるうち意気投合し、のちソニー研究所に移籍した。

ハムコード アマチュア無線通信を行う者に付される認証・コード

ルサインで、日本に付された国際呼出符号と地域番号で構成される。ちなみに文中登場者のコードは、岡登博美＝J2NC、中島泰男＝J2NY、石川舎人＝J2MV、柴田俊生＝J2OS、国澤忠次郎＝J2NR、住吉正元＝J1ESだった。

日本ビジネスオートメーション JBAのち「東芝情報システム」と改称した。

北海道ビジネスオートメーション HBA：一九六四年四月設立。二〇〇四年七月「HBA」と改称した。

金井元彦 かない・もとひこ／1903～1991。兵庫県に生まれ、東京帝国大学を出て内務省に入った。第二次大戦後、行政管理庁を経て六二年から七〇年まで兵庫県知事、のち参院議員となり、七八年第一次大平正芳内閣で行政管理庁長官を務めた。八〇年勲一等瑞宝章。

島田安也 しまだ・やすなり：「陸軍部隊最終位置」航空総隊リストに「第二航空軍直轄独立第一〇一教育飛行団第二六教育飛行隊隊長・中佐／陸軍士官学校三十八期」とある。

戦闘機「烈風」 れっふう：零戦を大型化して航行速度、航続距離を大幅に向上させた。加えて零戦の十二ミリ機銃四基と八ミリ機銃二基を、二十ミリ四基と十二ミリ二基に強化したもので、当時存在した戦闘機では最高かつ最強の性能を備えていた。一九四四年に制式採用され終戦まで三千四百八十八機が生産された。戦後、アメリカ軍が接収してテストしたところ、最大時速六百八十七キロ／時、高度六千メートルまでの上昇時間五分四八秒という高性能を記録している。

特攻潜航艇「回天」 かいてん：長さ十四・七五メートル 直径一・五メートル、総重量八・三トンで、艦頭に約一トンないし一・五

トンの爆薬が仕込まれていた。最高時速三十ノット（約五十六キロ）、巡航速度十ノットで最大二十三キロを潜水航行し、大型潜水艦に最大六基を搭載して敵艦隊に近づき、海中で発進した。判明しているだけで百四十五人の特攻兵が平均二十一・一歳の若さで戦死している。

**松田武彦** まつだ・たけひこ／1921～1999。

一九四三年九月東京帝国大学工学部造兵学科を出て海軍技術見習尉官となった。

076 降伏調印

第七十六

降伏調印

一

一九四九年に経済安定本部がまとめた「太平洋戦争による我国の被害総合報告書」によると、大日本帝国は一九四一年十二月から四五年八月まで、六百九万五千人の兵力を投入した。

うち死亡および行方不明は二百五十六万五千八百七十八人、負傷は三十二万六千人だとされている。死亡・負傷の割合は実に四二％に達するが、多くは戦闘での死亡・負傷でなく、餓死や病死あるいは自殺的行為によるものだった。

この数字には朝鮮や台湾など大日本帝国の植民地で徴兵された兵士、東南アジア諸国における現地徴用兵および、軍属、一般市民などが含まれていない。第二次大戦による日本側の死者は五百万人を上回ることには間違いない。直接戦費は五百十五億九千万ドル（一ドル＝三百六十円換算で十八兆六千億円）であった。

また終戦時の「国富戦災率」は、船舶の八〇・六％を筆頭に、機械器具三四・三％、建築物二四・六％、諸車二一・九％、家具等二一・六％、水道設備一六・八％などとなっている。ただ港湾・河川は七・五％、鉄道・軌道は七・〇％、橋梁は三・五％と大きな被害がなかった。

これはアメリカ軍が占領後のことを考慮して、施設を温存したためだった。だが船舶の大半が失われたために港湾は機能せず、鉄道は残っていても石炭の欠乏で汽車を走らせることができなかった。

数字から読めないこともあった。

例えば水道設備は全国の大半が川や井戸に依存していた実情からいって、困窮したのは大都市圏に限られた。鉄やアルミニウムの生産量はそこそこにあっても、市民生活に必要な食料品、衣料、肥料、医薬品などの生産設備が壊滅的な被害を受けていた。

また復員省の第二復員局がまとめた全国の戦災死亡者は約四十五万二千人だった。地域別にみると首都圏が約十七万六千人で最も多かった。木造家屋が密集する大都市という特性にねらいをつけて、米軍は焼夷弾による無差別爆撃を集中させた。さらに京浜地帯の工業・港湾施設が標的となった

中部東海地方は約五万二千人、関西は約三万二千五百人

である。中国地方は広島島の十二万九千五百五十八人を筆頭に十四万人強、九州地方は長崎の四万三千三十三人が群を抜いて多かつた。原子爆弾による被災が多くを占めた。

復員省が調査対象にしなかつたのは沖縄県だつた。この時点で沖縄県はすでにアメリカ領に準じる扱いを受けていたということであるらしい。その地では軍人・軍属九万四千三百三十六人（うち沖縄出身・二万八千二百二十八人）のほか一般市民九万四千人、外国籍約一万三千百人が死亡した。

外国籍の死亡者とは米・英軍の戦死者とは限らなかつた。戦前・戦中に日本領とされていた台湾、朝鮮民主主義人民共和国、大韓民国から徴用された人々である。このなかには日本軍「慰安婦」として強制連行・帯同させられた人々も含まれている。

## 二

占領軍の宿舍手配や警備、復員船の手配、復員兵受入れ態勢の整備などで、官僚機構は一応の機能を果たしていた。また終戦直後に結成された労働組合が五百九団体・三十八万六百七十七人であつたとか、四六年一月の東京における無許可露天商が五万八千二百三十七人であつたという数字

が残っている。このことからすると、行政機能と治安機能はなんとか機能していたらしい。

ただし、外地ではそうはいかなかつた。

中国に進出していた日本軍兵とその軍属に対して、日本の降伏が伝わると同時に報復が始まつた。略奪と陵辱、集団殺戮の悲劇が起こつた。わけても年寄り、女性、子どもが災難を被つた。

ややあつて中国国民党総統の蒋介石がラジオ放送で「報暴以德」（暴に報いるに徳を以てす）と中国全土に向けて訴えた。これが効を奏して、復員が円滑に進められた。これが縁となつて日本政府は蒋介石が亡命した台湾（中華民国）と親密な関係を結ぶことになる。

満州の場合は悲惨だつた。

終戦の詔勅は、日本軍将兵、軍属、入植者たちに届かなかつた。実際、新京に駐屯していたある部隊は八月十六日にも作戦行動を展開し、豪雨の中を公主嶺という町に向かつていた。この部隊が手にしていたのは、兵一人当り小銃が一丁、弾丸が二十五発、手榴弾が二発だつた。

途中、暴徒の賊に襲われ、これを突破する中で数人の兵士が斃れ、あるいは絶望した古参兵が手榴弾で自決した。

それから丸二日間、不眠不休の行軍が続き、ようやく公主嶺たどり着いた。そこで初めて日本が戦争に負けた——負



けを認めた——ことを知った。

八月十九日、この部隊はソ連軍に包囲される中で武装解除となり、しばらく公主嶺の工場跡地で捕虜生活を送ったのち、「日本に送還する」という名目でシベリア行きの汽車に乗せられた。汽車といっても客車でなく貨車である。旧日本兵は家畜と同然の扱いだつた。

同じように計六十九万二千人の旧日本兵がシベリアに送られ、ツンドラの大地の耕作や劣悪な条件での石炭採掘の仕事を強制されることになった。うち一割に相当する約七万人が病氣や飢えで死没している。

余談だが、東側をソ連軍に占領されたドイツはもつと悲惨だつた。正確な数は伝わっていないが、ナチス・ドイツの降伏に伴い、旧ドイツ軍兵士約百万人がソ連領に送られ、強制労働に従事させられたという。

難を逃れた兵士と軍属および、満州に殖民した日本人たちには、長く苦しい逃亡の旅が始まつた。乳飲み子が飢え死にし、幼い子どもたちは父母と生き別れになることもあつた。中国残留孤児の問題が表面化するのには、戦後三十年を経てからである。

家財のすべてを失い、乞食同然になつた避難民の列は、朝鮮半島をさらに南下し、北緯三八度線でアメリカ軍に収容された。そこでは共産圏勢力との対峙が始まつていた。

同じようなことが樺太でも起こつた。

そのころ、日本の占領に当たつてソ連代表のデレビヤンコ中将が釧路と留萌を結ぶ線から北をソ連の統治として、マッカーサーと激しくやりあつていた。

『マッカーサー回想記』は次のように記す。

ソ連は、占領当初から、問題を起こしはじめた。ソ連に北海道を占領させて、けつきよく日本を二つに分けるといふ要求を持ち出したのだ。

(中略)

私は真正面からそれを拒否したが、デレビヤンコ將軍は罵らんばかりの調子で、ソ連はかならず私を最高司令官の職から罷免してみせるとおどし、私が承知しようがすまいが、ソ連軍はとにかく日本に進駐するとまで極言した。

この脅迫めいた発言に対してマッカーサーは言つた。

「もしソ連兵が、一兵たりとも、私の許可なく日本に入つたら、デレビヤンコ將軍も含めて、ソ連代表部の全員を即座に投獄するまでだ」

この劍幕に驚いてデレビヤンコは答えた。

「まったくの話、君ならそれをやつてのけるだろう」  
以後、ソ連はこの話題を持ち出すことがなくなつた——

という。これがために日本はドイツや朝鮮半島のように同胞分断の悲劇を味わわずに済んだ。

八月二十九日、ワシントン政府はマッカーサー連合国軍総司令長官を通じて「日本は間接統治とする」旨を東久邇内閣に通達した。日本は連合軍の占領下にありながら、まがいなりにも自分たちの政府を持つことができた。占領軍約三十万人（ピーク時は四十三万人）および、国際赤十字などの上陸と配備が完了したのは、九月末である。

三

ポツダム宣言の無条件受諾、天皇の肉声による「終戦の詔勅」放送があった八月十五日に時を戻す。

東久邇稔彦は明治天皇の弟・久邇宮朝彦の第九子として、一八八七年（明治二十年）京都に生まれた。一九〇六年（明治三十九年）「東久邇宮」家を興し、イギリスに学んだ後、陸軍に入った。

三二年に陸軍中将、三九年に大将と順当に昇進し、四一年十二月に防衛総司令官に就任した。フランスに留学し、皇族きつての自由主義者として知られたことから、一九四一年に近衛文麿が内閣を放り出したとき、彼を首相に擁立する動きがあった。

結果として東条英機を推す木戸幸一の画策でそれは実現しなかった。太平洋戦争末期は反東条の旗色を明らかにし、戦争終結の工作に参加した。彼の主張はソ連と防衛同盟を結び、アメリカやイギリスを牽制しようとする点に特徴があった。

彼が臨時内閣首班だったのはわずか五十日ではない。このために彼の内閣は

「ポツダム宣言受諾後の第一次的処理を担った」と評価される。だが、仮にアメリカ合衆国政府とイギリス政府の利益が一致していれば、もっと長く首相にあった可能性もある。

のち四七年に皇籍を離脱し、一九九〇年に百二歳で没した。歴代首相でただ一人、百歳以上の天寿を全うした人物となった。また彼の死をもって、旧帝国陸海軍の大将はすべて地上から消滅した。

その内閣は、連合国軍総司令部（GHQ）の方針を国民に伝えるスピーカーの役割しか果たさなかった。無条件で降伏した以上、それは止むを得ないことだった。

クーデターやテロがいつ起きても不思議ではない状況の下で、ともかくにも国内の治安を維持した点は評価されるべきかもしれない。旧帝国陸海軍の武装解除、満州、中国、東南アジア、太平洋諸島からの日本人の帰還、降伏文

書への調印、官僚機構の維持・存続および、天皇制の維持など、戦後日本の軌道をかたちづくった。

酷評されるのは大仏次郎、賀川豊彦、児玉誉士夫の三人を「内閣顧問」として迎えたことだった。戦後、一貫して体制批判を貫いた評論家青地晨は次のように厳しく論評している。

大仏は軍国主義から文化国家への脱皮のシンボルで、クリスチャンの賀川はアメリカ人に信用があったので、対米アクセサリーとしてえらばれた。また児玉は戦争中、上海の児玉機関の大親分で、軍につながる実力者であった。大陸で集めた金銀財宝をごっそり持ち帰って地中に埋め、鳩山自由党の創立資金にしたというウワサの人物である。この三人を顧問にした東久邇内閣は、マジジャンにたとえれば大三元内閣みたいなものである。

八月十六日の午前、アメリカ合衆国政府から

「正式な降伏文書を受理するため、連合軍最高司令官の指示する打合わせをなすべき、十分の権限を与えられたる使者をただちに派遣せよ」

という指示が日本に届けられた。

鈴木内閣は総辞職していたし、東久邇内閣はまだ発足し

ていなかった。わずかな時間だったが、日本には政治の空白が生じていた。ただし官僚機構は健在だったので、この通知は通常の外交手続きを経て内閣総理大臣の座すべき机上に届けられた。

前後して連合軍最高司令官のダグラス・マッカーサー（元帥）から、

マニラ市にある連合国軍最高司令部に、日本国天皇、日本国政府、日本軍大本営の名において、降伏条件を遂行するため必要なる諸要求を受理するの権限を有する代表者を、天候の許す限り、八月十七日東京時間の午前八時から十時の間に出發せしめよ

という命令が届けられた。

東久邇内閣は最初の閣議で協議の結果、陸軍中將・川邊虎四郎を全権に、海軍少將・横山一郎を主席随行者とする一計十七名を海軍の輸送機二機で派遣することを決定した。

一行は連合国軍の指示に従って日の丸をペンキで消し、全体を白色に塗装した海軍九六式艦上攻撃機二機に分乗して出發した。

国籍を抹消した日本海軍の輸送機が離陸すると、連合国軍総司令部の指示を受けたアメリカ海軍の戦闘機が護衛に

ついた。日本軍、アメリカ軍ともいまだに臨戦態勢にあつて、連合国軍司令部は日本代表団の乗機が撃墜されることを懸念したのである。

二機の九六式艦攻は沖縄の伊江島まで飛び、そこで川邊らはアメリカ軍の輸送機DC4に乗り換えてマニラに到着した。ここで占領軍の先遣隊が八月二十三日に厚木飛行場に進駐することが決まった。

二十日、灯火管制が解除された。

二十七日、大日本言論報国会が解散した。

二十八日、占領軍の先遣隊が神奈川県厚木飛行場に到着した。折から接近していた台風のため、二十三日の予定が遅れたのである。先遣隊は厚木飛行場を旧日本軍から接收するとともに、占領軍総司令部の開設や占領軍の進駐の準備に取りかかった。

三十日、連合軍総司令官であるダグラス・マッカーサーが「バターン」と名付けられた大型輸送機で厚木飛行場に到着した。バターンとは、彼が屈辱を味わったフィリピン戦線の地名に由来している。五つ星の帽子とレイバンのサングラス、片手にコーンパイプという姿でタラップを降りたこの人物が、戦後日本の最高権力者となる。

九月二日午前九時四分、東京湾に停泊するアメリカ軍戦艦「ミズーリ」甲板上で、外務大臣重光葵を全権とする日

本政府代表団が降伏文書に調印した。このときマッカーサーは連合国軍最高司令官として最初の「一般命令」を発令した。日本領と太平洋戦争によって日本軍が占領した地域における日本軍と日本の資産および、戦後統治の分担に関するもので、そこには次のように記されていた。

・満州および北緯三八度線以北の朝鮮、サハリン、千島  
　　〓 連極東軍最高司令官ワシレフスキー元帥に降伏。

・日本本土および北緯三八度線以南の朝鮮、琉球、フィリピン  
　　〓 米太平洋陸軍最高司令官マッカーサー元帥に降伏。

・その他、中国・台湾・北緯一六度線以上の仏印  
　　〓 国民政府蔣介石に降伏。

・東南アジア  
　　〓 オーストラリア東南アジア軍司令官に降伏。

・太平洋委任統治諸島・小笠原諸島  
　　〓 米太平洋艦隊最高司令官ニミッツ大将に降伏。

降伏文書にサインするために宿舎の帝国ホテルを出るとき、重光は秘書官の竹光秀正に、

——ペンを持っているか。と尋ねた。

竹光が万年筆を差し出すと、それをモーニングの内ポケットに収めながら、

「向こうのペンなど使えるか」

と眩くように言った。

このとき、フランス代表のフィリップ・ルクレールが間違つてオランダ代表の欄に署名してしまった。このためオランダ代表コンラート・ヘルフリッヒはその下のニュージールランドの欄に、ニュージールランド代表のレナード・モンク・イシット空軍中将はしかたなく欄外に署名することになったというエピソードが伝えられている。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

日本の分割統治 マッカーサーの反撃にあつて分割統治に失敗したソ連代表のデレビヤンコ中将は、日本占領軍司令部からマッカーサーを排除することをイギリス、オランダ、中国、オーストラリアなどに働きかけた。このことがのちの極東軍事裁判の歪みにつながつていった。

デレビヤンコ Kozma Derjavanko / 1903 ~ 1954。一九二二年、ソビエト赤軍に一兵卒として参加し三六年、モスクワの陸軍大学を出た。第二次大戦ではヨーロッパ戦線でナチス・ドイツ軍と戦い中将に昇進、一九四五年四月以後、対日戦線に転じた。連合軍対日理事会ソ連代表として日本の政府・軍関係者の公職追放、農地改革などを推進した。五〇年に日本を離れ帰国し、退役した。

東久邇稔彦 ひがしくに・なるひこ / 1887 ~ 1990。明治天皇の没後、健康状態が思わしくなかつた大正天皇の後継者問題に関連して、父親の久邇宮朝彦が長く広島に幽閉に近い状態で隔離されていた。そのこともあつて、皇族ながら反体制的な気骨を持つていた。第二次大戦後の東西冷戦をいち早く見抜いていた。著書に『皇族の戦争日記』(一九五七) などがある。

大仏次郎 おさらぎ・じろう / 1897 ~ 1972。横浜に生まれ東京帝国大学を卒業した。外務省に入り翻訳業務に従事しつつ、「鞍馬天狗」で作家としてデビューした。主な著作に『赤穂浪士』『帰郷』『旅路』『天皇の世紀』などがある。一九六四年に文化勲章。本名は野尻清彦であつて、研究社編集部長で天文学者の野尻

抱影(本名「正英」)の実弟でもある。ちなみに「鞍馬天狗」は小説『鬼面の老女』に初めて登場し、以後、連作として一九五九年まで書き継がれた。

賀川豊彦 かがわ・とよひこ / 1888 ~ 1960。兵庫県に生まれ、アメリカのプリンストン大学を出て一九一七年に帰国した。中学時代にキリスト教の洗礼を受け、路傍伝道を行うなど宗教者としての活動を通じて貧民層の救済に従事した。一九一九年発足の「関西労働同盟」で理事長を務め、川崎・三菱神戸造船所の労働争議を指導した。第二次大戦後、勅選議員隣、日本社会党の結党に参加した。川崎・三菱神戸造船所の労働争議のとき、労働組合と関西労働同盟事務局の間をつなぐ連絡係が大宅壮一だった。

児玉誉士夫 こだま・よしお / 1911 ~ 1984。福島県に生まれ国家主義者として頭角を現した。一九三一年、大蔵大臣・井上準之助の暗殺を計画して検挙されたのち満州に渡つて陸軍参謀本部の嘱託となつた。第二次大戦中は海軍航空本部の委嘱で中国における物資調達や宣撫工作に従事し、その組織は「児玉機関」と称された。第二次大戦後、A級戦犯に指名され、五一年公職追放解除となり、以後も政財界の黒幕的存在として力を持った。ロッキード事件で田中金脈の中核的な人物としてクローズアップされた。逮捕ののち裁判中に没した。

青地 晨 あおち・しん / 1909 ~ 1984。富山県に生まれ佐賀県で少年期を過ごした。一九三八年、中央公論社に入り、編集次長。四四年に横浜事件に連座して逮捕され拷問ののち虚偽の自白をしたことが生涯の大きな負い目となった。四五年十月、世界評論社を興して編集長、五〇年に評論家として自立した。大宅壮一と親交を結び「ノンフィクション・クラブ」世話人。一九七

三年に起こった韓国大統領候補者金大中拉致事件をきっかけに日韓連帯連絡会議を主宰し、以後、冤罪問題に取り組んだ。著書に『魔の時間』『冤罪の恐怖』などがある。

マッカーサーのコーンパイプ 第一次大戦のヨーロッパ戦線で初めてコーンパイプを手にした写真を撮影し、以後、位が上がるたびにパイプを大きく、より目立つようにした。ヘビースモーカーであることは、当時の陸軍兵士から尊敬を受ける条件だったからだが、マッカーサーはタバコを吸わなかった。

戦艦「ミズーリ」 全長約二百七十メートル、全幅約三十三メートル、排水量四万八千五百トンのアイオワ級三番艦で、一九四一年一月に就役し四五年四月の沖繩上陸作戦に参加した。同年七月十三・十四日には北海道室蘭の製鉄所、十七・十八日には茨城県日立市の工業地帯を砲撃し、八月二十九日東京湾に入った。

降伏文書の調印に使われたのは、大統領トルーマンの出身地にちなんでいた。同時に陸上だと方が一、帝国陸軍の反乱兵が調印を邪魔するかもしれないと懸念した、という説がある。

のち朝鮮戦争に参加し五年に退役したが八六年に再就役して九一年湾岸戦争の支援活動に従事した。ちなみに降伏調印式のと き、砲台に飾られていたのはマシュー・ペリー提督が徳川幕府と日米和親条約を結んだときのものであった。

重光 葵 しげみつ・まもる／1887～1957。大分県に生まれ一九一一年東京帝国大学法科を卒業して外務省に入った。三年、中国公使となり、三二年四月、爆弾テロで片足を失った。三三年から三六年まで外務大臣・広田弘毅の下で次官を務め、以後、ソ連、イギリスに大使として赴いた。ナチス・ドイツを過大評価する近衛内閣に異論を示し、日独伊三国同盟に反対した。第

二次大戦中は東条内閣、小磯内閣で外務大臣、東久邇内閣でも外務大臣となったが、四六年にA級戦犯に指名され禁固七年の判決を受けた。五二年、改進黨総裁を経て五四年に日本民主党副総裁として鳩山一郎内閣で副総理兼外務大臣を務めた。

調印式の随員 重光葵は天皇と大日本帝国政府を代表し、梅津美治郎は大本営陸海軍部を代表した。日本全権随員は陸軍の宮崎周一(中将)、永井八津次(少将)、杉田一次(大佐)、海軍の富岡定俊(少将)、横山二郎(少将)、柴勝男(大佐)、外務省の岡崎勝男(終戦連絡事務局長)、加瀬俊一(内閣情報第三部長)、太田三郎(終戦連絡部長)だった。

また連合国側は連合国代表がダグラス・マッカーサー陸軍元帥、アメリカ合衆国軍はC・W・ニミッツ海軍元帥、中国(中華民国)政府は徐永昌上將軍、イギリス(連合王国)政府はブルース・レーザー海軍元帥、イギリス軍はアーサー・パーシバル陸軍中将、ソ連はクズマ・デレビヤンコ中将、オーストラリアはトーマス・ブレイミー陸軍元帥、カナダはエル・ムーア・コズグレイヴ陸軍大佐、フランスはフィリップ・ルクレル陸軍大将、オランダはコンラート・ヘルフリッヒ海軍中将、ニュージーランドはレナード・モンク・イシット空軍中将だった。

077 占領

第七十七

占領

一

占領軍として日本に上陸したのは、アメリカ陸軍の第六軍と第八軍である。第六軍は京都に、第八軍は横浜にそれぞれ司令部を設置した。その後、同年十二月に第六軍が撤収して、日本全土が第八軍の占領下に置かれるようになった。ただし誤解を避けるために前もって書くと、これはあくまでもアメリカ陸軍であって連合国軍ではない。

マッカーサーが率いた第一陣の兵力は八千人で、戦車を筆頭に兵士は完全武装で飛行場に降り立った。彼らはジーブヤトラックに分乗し、暫定司令部を設置した横浜に向かった。兵団の一部は晴海一帯の築地四号地に進出している。次いで海上輸送で到着した約三万四千人の後続部隊が進駐し、占領軍の約一割が東京に展開した。銀座、日比谷、大手町、赤坂、渋谷などのビルが接収され、すべて占領軍の施設に改修された。

先遣隊は、使用可能なビルや宿泊施設、稼動可能な統計

会計機械装置などの有無を調べている。占領軍が進駐したときの物資補給体制を作るのが目的だった。

これによって銀座の服部時計店はアメリカ陸軍第八軍の兵士に日用品を販売する「東京PX」、銀座松屋は将校クラブとPXに、有楽町の東芝ビルは極東空軍宿舎と将校用会食場、ドル交換所、日比谷の帝国ホテルは高級将校宿舎、新橋および銀座の第一ホテル、赤坂の東急ホテル、山王ホテルなどは佐官級将校、千駄ヶ谷の日本青年館などは尉官級の宿舎に、九段の軍人会館は高級将校用レストランに転用されている。

また大手町の教文館ビルはタイム・ライフ社、築地の電通ビルはニューズウィーク社が占有し、東京宝塚劇場は「アーニー・パイル劇場」に名称を改めた。その名前はスクリップ・ハワード系新聞の特派員の名にちなんだものだった。

アーニー・パイルはヨーロッパ戦線で連合軍兵士と寝起きをともし、最前線から兵士たちの姿をいきいきと描いたルポを送って人気を博し、四五年四月十八日、沖縄戦に巻き込まれて死亡した。アメリカ軍はその名を劇場につけることで、兵士の士気を維持しようとしたのであろう。

また松坂屋の地階にダンスホール「オアシス・オブ・ギンザ」が設けられた。食糧、映画、娯楽のほか、日本政府

が準備した慰安所——日本女性による特殊サービスの場——にはすべて、「日本人立入禁止」の表示が掲げられた。占領軍は兵士と日本人とをなるべく隔離しようとし、日本政府もそれを望んでいた。

全国の駅や主要都市の要所に、地名をローマ字で表示することが義務づけられ、さらに東京の主要な道路はアメリカ式の呼び名に改められた。第一京浜の日比谷通りは「Aアベニュー」、晴海通りは「Zアベニュー」、現在のみゆき通りは「アネックス・アベニュー」と呼ばれた。

青山通りが「F」、甲州街道が「H」、青梅街道が「K」、川越街道が「N」、日光街道が「Q」、銀座通りは「GINZAストリート」、外濠通りは「ナンバー5」、昭和通りが「110ストリート」といった具合だった。

日本占領軍はニューヨークに置かれた極東理事会（アメリカ合衆国、イギリス、フランス、ソビエト連邦共和国、中華民国、オランダ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、インド、フィリピンで構成）の配下にあったものの、最高司令部総司令官に任じられたマッカーサーは最初から「自分のやり方」を通していた。

その最初は、横浜のニューグランドホテルを第八軍の司令部に選んだことだった。

——自分が新婚旅行のとき、このホテルに泊まったんだ。

というのが理由だった。

極東理事会はほほえましいエピソードとして聞き流した。次いでマッカーサーは八千の将兵を率いて東京に進駐した九月八日、連合国軍総司令部の設置場所を一存で決定した。

極東理事会はそのことについても——現地の都合であろう。

と理解した。ところが彼は十七日、日比谷の第一生命ビルの上に星条旗をひるがえした。

異論が出た。

——なぜ星条旗なのか。

当然の異論だったが、マッカーサーは——アメリカ合衆国が最も多くの血を流した。

——と言って突っぱねた。

結局、それが通った。

以後、一九五二年六月まで、GHQの指令はここから発せられることになる。

つい数日前まで「米英鬼畜」を叫び、「一億玉碎」を口にしていた日本国民が、あまりに素直に占領軍を受け入れ、あるいは歓迎したことは、世界的な視点ではまことに不思議な現象といわなければならない。

二

当時の状況を加藤秀俊（学習院大学教授、のちコミユニケーション・デザイン研究所長）は次のように評している。

敗戦後の数か月はまったくの空白状態であった。日本人はどうしてよいかまったく途方にくれてしまったのである。戦争に勝つためにすべてを投入し、また戦争に勝つことに生きがいをかけていた人間たちにとって、敗戦はあまりにも大きな心理的衝撃でありすぎたのだ。

ある意味でこの空白期間は、日本人すべての痴呆状態の期間であったといってもよい。

八月十五日の夜から、サイレンは鳴らなかった。とにかく眠れる夜がおとずれた。日本は完全に廢墟であった。東京も大阪も、焼けただれたトタン板だの、レンガだののほか、なにもなかった。しかし、その荒廢した焼土のなかにも生活の灯がともった。

なによりもうれしかつたのは、軍隊や工場にひっぱり出されていた男たちが帰ってきたことである。ポツダム宣言の第九条には「日本国軍隊は完全に武装を解除せられたるのち、各自の家庭に復帰し、平和的かつ生産的の生活を営

むの機会を得しめるべし」とあった。

銃を捨てて、男たちは家庭に帰ってきた。

まず帰ってきたのは軍需工場や労働奉仕に駆り出されていた男たちだった。それだけで二百万人に達したという。

九月二十五日に初めての復員船が到着した。

四五年十一月における日本の総人口は七千九十九万八千四百人とされているが、四七年十月に行われた臨時国勢調査では七千八百十万一千四百七十三人と六百万人以上増えている。

日本やアメリカやイギリスなどの軍隊が突然、ドンパチと撃ち合いを始めた。その舞台となったアジア諸国からすれば、勝手に乗り込んできただけで迷惑な話であったろうし、引き揚げていくのは当然のことだった。かつ、日本に残された家族たちにとっても喜ばしいことだった。

ただ、経済の観点からすると、何ら生産を行わず食糧を消費するだけの六百万人というのは、とんでもないことだった。つまり、日本の全国民がその日暮らし、着の身着のまままで明日の食い扶持がままならない乞食になったのだ。

マッカーサーが最初に打ち出したのは、大日本帝国の解体と民主化のための施策だった。

ポツダム宣言には次のようにあった。

吾等は日本人を民族として奴隸化せんとし、又は国民として滅亡せしめんとするの意図を有するものに非ざるも、吾等の俘虜を虐待せる者を含む一切の戦争犯罪人に対しては嚴重なる処罰を加えらるべし。

日本国政府は日本国国民の間に於ける民主主義的傾向の復活強化に対する一切の障礙を除去すべし。言論、宗教及び思想の自由、並に基本的人権の尊重は確立せらるべし。

日本国は其の経済を支持し、且つ公正なる実物賠償の取立を可能ならしむるが如き産業を維持することを許さるべし。但し日本国をして戦争の為、再軍備を為すことを得しむるが如き産業は此の限に在らず。右目的ノ為、原料の入手（其の支配とは之を区別す）を許可さるべし。日本国は将来、世界貿易關係への参加を許さるべし。

前記諸目的が達成せられ、且つ日本国国民の自由に表明せる意思に従い、平和的傾向を有し、且つ責任ある政府が樹立せらるるに於ては、聯合國の占領軍は直に日本国より撤収せらるべし。

四五年九月十一日、GHQは東条英機など三十九人を「戦争犯罪人容疑者」として逮捕し、二十二日には「降伏後におけるアメリカの初期の対日政策」を発表した。この

とき、東久邇内閣の最大の関心事は、戦争責任が天皇に及ぶかどうかということだった。

三

一九九〇年十二月、マリコ・テラサキ・ミラー（マリコ・グエン・テラサキとも）という日系アメリカ人女性が「昭和天皇独白録」を雑誌『文芸春秋』に発表した。彼女の父で、外務省駐米大使館一等書記官から宮内省御用掛に転じた寺崎英成が遺した日記および、寺崎が写筆した天皇独白録がそれである。

ちなみに彼女の名「マリコ」は、一九四一年春からアメリカ合衆国務長官ハルと戦争回避の外交交渉に当たっていた駐米日本大使館の内で、対米交渉の成り行きを示す暗号として

——マリコの様子はどうか。

——容態は思わしくない。

などというかたちで用いられた。

当初は寺崎英成と外務省アメリカ局長の実兄太郎との間で使われた符牒だったという。

通説では、二十九日に昭和天皇がマッカーサー元帥を占領軍総司令部に訪ねたとき、天皇は「戦争の責任はすべて

自分にある」と明言し、一方で政府関係者が総司令部から天皇制の維持・継続を確認した——ということになっている。

しかし「独白録」では、天皇側近は、天皇の逮捕、極刑もあり得ると判断していた。そのために、弁護のために「独白録」を作成したのだ、という見方は、おそらく正しい。

事実、GHQに国際検事局が設置されたのは四五年十二月八日であり、極東軍事裁判所憲章が公布されたのは四六年一月十九日であって、この時点で連合国首脳は日本の天皇の免責を決定していなかった。

GHQ首脳との会合で、寺崎はふとしたことから、マッカーサーの側近であるボナー・フェラーズ准将が、妻のグエン・ドレン・ハロルドの遠戚であることを知った。フェラーズ准将もそれをきっかけに、寺崎にだけはGHQの本音がある程度まで打ち明けたらしい。幸運なことにその准将が、天皇問題に関する助言役を務めていた。

マッカーサーが、

「天皇を戦犯から除外するべきである」

という旨の電報を連合国首脳に向けて打ったのは四六年一月二十五日だった。寺崎がフェラーズ准将からマッカーサーの意思を内示されたのは三月二十五日、極東委員会が

不起訴の決定を下したのは四月三日のことだった。

四

一九四五年の秋から翌年の春にかけて打ち出されたGHQによる改革指令を見ると、次のようになる。

一九四五年

9月9日 マッカーサー声明「自由主義助長など日本管理の方式」

理の方式」

10日 言論及び新聞の自由に関する覚書

19日 プレス・コード指令

22日 ラジオ・コード指令

10月4日 民主化指令（自由の指令）

①天皇に関する自由討議

②政治犯釈放

③思想警察全廃

④内閣特高警察罷免

⑤統制法規廃止

11日 首相・幣原喜重郎に五項目の改革を指示

①婦人解放

②労働者の団結権

③教育の自由化

④専制政治の廃止

⑤経済機構の民主化

22日 日本教育制度に対する管理政策

25日 日本政府の外交機能停止

30日 軍国主義教員の追放

11月2日 財閥解体

24日 内大臣府を廃止

12月9日 農地解放

15日 国家神道の廃止

一九四六年

1月1日 天皇の人間宣言

4日 公職追放に関する覚書

2月13日 新憲法草案

4月10日 第一回総選挙

こうした施策の推進力となったのは民政局だった。その局長に就任したコートニー・ホイットニー少将（日本進駐のとき准将から昇格）をはじめ、スタッフはニューデイルの信奉者たちだった。弁護士出身者などが多く、職業軍人が少なかった。

矢継ぎ早に改革指令を打ち出すのと並行して、GHQは

自分たちが行った本土爆撃の被害がどの程度のものであったかを精力的に調査した。

作戦の成果を計数的に把握するだけでなく、それが日本の産業にどういう影響を与えたか、国民にどういった心理的圧力をかけたかを総合的にとらえることに目的があった。このために「戦略爆撃調査団」が編成された。

同調査団はGHQの名において設置され、同じ調査がヨーロッパにおいても並行して、対ナチス・ドイツ占領地域について行われた。調査のポイントや評価の手法は同じだったが、ヨーロッパ地域での調査はアメリカ合衆国とイギリスが主導的な立場にあり、フランス、オランダなどが協力した。日本や中国大陸、朝鮮半島については、アメリカ軍が担当した。ここで質的な違いが出た。

ことに日本における調査は、それもまたニューデイルたちの考え方を色濃く帯びた活動だった。第二次大戦後の日本における計算機の利用という本来のテーマに移るまで、いましばらく時間と紙幅を許されたい。

補注

アメリカ陸軍第八軍 ダグラス・マッカーサー直率の占領軍。のちに勃発した朝鮮戦争で半島に派遣され、以後、アメリカ極東軍の中核的部隊としてソウル市内に本拠地を置いた。

PX ポスト・エクスチェンジ・占領軍兵士が故郷に送る手紙や送金を受け付け、並行して飲食物や衣料品を販売した。

九段の高級将校用レストラン データサービス創業者の坂本政恵はコック見習いとして働いていた。彼はそこで英語を学びながら明治大学に通った。

アーニー・パイル Ernie Pyle / 1900 ~ 1945。一九四五年四月十八日、沖繩諸島伊江島に上陸した米第三〇五連隊に従軍して取材中、日本軍の機関銃弾に倒れた。遺体を埋葬した地には木製の十字架が立てられていたが、後に沖繩本島の陸軍墓地、さらにはのちホノルルの国立墓地へ移された。パイルが機関銃に倒れた伊江島には記念碑が建っている。

日比谷第一生命ビル 同ビル内にはGHQ司令部が使用した部屋とマッカーサーが座った椅子が保存されている。またWebで三六〇度のバーチャルな「マッカーサー記念室」を見ることができ

る。

最初の復員船 一九四五年八月二十二日、樺太からの引揚者を乗せた小笠原丸、泰東丸、第二新興丸が北海道増毛町沖で国籍不明の潜水艦から攻撃を受け、小笠原丸と泰東丸が沈没した。このため約一千七百人が犠牲となった。翌二十三日には朝鮮半島からの引揚者を乗せた浮島丸が舞鶴湾港に向かって航行中、蛇島付近で

機雷に接触して沈没、五百二十四人が死亡した。

こうしたことから日本政府は二十五日に「陸海軍軍人の復員に関する勅諭」を発令し、連合国軍の了解を得て九月一日に食糧と医薬品を輸送するためミレ島とメレヨン島に病院船をそれぞれ送ることが許可された。千六百二十八人を乗せた特設病院船「高砂丸」がメレヨン島から別府港に戻ったのが第一船だった。

マリコ・テラサキ・ミラー Mariko Terasaki Miller / 1932 ~ 2016。外交官・寺崎英成とアメリカ人女性グエン・ハロルドの一人娘として上海で生まれた。日米開戦と伴に一家で日本に帰国し、朝鮮戦争が勃発した四九年、母グエンとともにアメリカに渡った。五三年州立イースト・テネシー大学を卒業、弁護士メイン・ミラーと結婚した。五七年母グエン・テラサキが夫・寺崎英成の遺文をもとに著わした『太陽に架ける橋』の主人公として知られるようになった。一九九五年、在米名誉総領事に任命された。

寺崎英成 てらさき・ひでなり / 1900 ~ 1951。神奈川県に生まれ一九二一年東京帝国大学を中退して外務省に入った。ワシントン駐在中に知り合ったグエン・ドレン・ハロルドとの結婚は日米関係が悪化している折から周囲は大反対だった。

天皇制の廃止 GHQないしヨーロッパの戦勝国と中国政府が天皇制の廃止を主張していることを知った旧軍部は、昭和天皇を京都の仁和寺に出家させて裕仁法皇とし、皇位継承権を持つ然るべき人物を擁立して新政府を樹立することを計画した。また皇統護持作戦で新潟県六日町や宮崎県杉安に北白川宮道久王を匿うことも計画した。マッカーサーやホイットニーはこの動きを察知し、天皇制廃止を強行すれば、それをソ連が政治的に利用して内乱状

態が発生するかもしれないことを警戒した。以上のことは中野学校出身で皇統存続計画に参加していた村中一夫が「終戦秘話」と題して記録に残している。

自由の指令 反体制的な思想や言動を厳しく取り締まっていた大日本帝国政府に対し、四五年十月四日、GHQは自由を抑圧する制度を廃止するよう命じた。正式には「政治的、公民的及び宗教的自由に対する制限の除去の件(覚書)」である。思想、信仰、集会および言論の自由を制限していたあらゆる法令の廃止、内務大臣、特高警察職員など約四千人の罷免・解雇、政治犯の即時釈放、特高の廃止などを命じていた。東久邇内閣はこれを実行できないとして翌五日に総辞職した。

コートニー・ホイットニー Courtney Whitney / 1897 - 1969。ワシントンD・Cに生まれ、第一次大戦では陸軍少尉として参加した。四五年八月三十日、マッカーサーとともに厚木基地に降り立ち、連合国軍総司令部の民政局長に任命された。日本の独立に尽力するとともにマッカーサーを大統領にすべく全精力を注入したことも知られる。

幣原喜重郎 してはら・きじゅうろう / 1872 - 1951。大阪に生まれ東京帝国大学法科を卒業して外務省に入った。ロンドンに赴任中、駐英大使・加藤高明の夫人の妹(岩崎弥太郎の次女)と結婚した。一九二四年、加藤高明内閣で外相となったのを機に「幣原外交」を展開し対中国内政不干渉を推進した。満州事変では不拡大路線を採ったが関東軍に押し切られ、以後、政界から退いた。四五年十月、東久邇内閣のあとを受けて組閣し、四六年の第一回総選挙、日本国憲法の草案策定などに努めた。のち進歩党総裁、民主党名誉総裁、民主自由党最高顧問などを務め、衆議院

議長在任中に没した。

ニューデール 全体主義的経済政策。金融恐慌に端を発した一九三〇年代の深刻な不況を克服するため、ルーズベルト大統領は国家統制的な金融、物価、投資、雇用などの政策を推進した。全国産業復興法に基づく強制カルテルの結成、農業調整法に基づく主要農産物の作付制限、金本位制の停止、赤字国債による巨額の公共投資、金融機関に対する国家保証制度などである。

同様のことをヨーロッパ諸国も行い、それが国家主義と結びついた結果、ドイツでナチスを、日本で国粹主義を生み出した。アメリカは自由主義経済を国家の原則としていたため国家統制的経済政策が馴染まず大きな成果をあげることができなかったが、四〇年代に入って第二次大戦の戦争経済に直面したとき、この考え方が再浮上した。同じ全体主義的経済政策でもナチス・ドイツや大日本帝国が軍部と軍需産業の主導であったのに対し、アメリカは文民と産業人主導による民主主義原則を貫き、戦争が終結した時点で自由主義経済に回帰することを目的としていた点が決定的に異なっていた。

078 G H Q

第七十八

G H Q

一

時間が行きつ戻りつする。

またまた計算機や情報処理の話ではない。時代の状況を語るために、あえて紙幅を費やす。

これまで説明もなく、当たり前のように使ってきた「G H Q」についてである。G H Qはどのような組織で何をやっていったのか。

英文の正式名称は「General Head Quarters」、本来の意味は「総司令部」ということになる。

第二次大戦後に日本を占領統治した連合国軍最高司令官総司令部は、正確には「G H Q / S C A P」(General Head Quarters / Supreme Commander for the Allied Powers)と表記された。

その組織は大きく参謀部と幕僚部に分かれ、それぞれに次のような部局があった。

参謀部

- 第1部 (G 1 || 人事担当)
- 第2部 (G 2 || 情報担当)
- 第3部 (G 3 || 作戦担当)
- 第4部 (G 4 || 後方担当)

幕僚部

- 民政局 (G S || 行財政)
- 経済科学局 (E S S || 財閥解体など)
- 民間情報教育局 (C I E S || 教育改革など)
- 天然資源局 (N R S || 農地改革など)

このうち参謀部では諜報・保安・検閲を任務とする第2部が大きな発言権を持ち、幕僚部では非軍事化・民主化政策を担当する民政局に主導権があった。この組織は、かたちの上では連合国で組織する極東委員会の統率下にあった。

一方、占領軍の主体はアメリカ陸軍第八軍であって、マッカーサーはG H Qの総司令官であると同時に、アメリカ第八軍の総司令官でもあった。また連合国軍とはいっても、大半の職員はアメリカの軍人と民間人で構成されていた。

このことは、占領統治組織の運営を円滑に進めるにはG H Q、すなわち戦いに勝った連合国諸国とアメリカ合衆国の意向が一致していることが条件となる。ところが建前上、

GHQは複数の国によつて運営されていたために、一枚岩というわけにはいかなかった。

占領開始直後にソ連のデレビヤンコとマッカーサーが日本の占領統治をめぐる衝突したのは、その表われの一つである。また天皇制については、ソ連とオーストラリア、中国が、表立ってではないにしても「廃止」が妥当、と考えていた。

さらに日本の占領統治についてヨーロッパの戦勝国は

——北海道をソ連、関東・東海・中部・北陸をアメリカに譲る代わりに、東北、関西、中四国、九州をイギリス、フランス、オランダ、オーストラリアなどに譲渡すべきである。

という相談をまとめていた。

——それはあくまでも占領統治に限定してである。

とヨーロッパ戦勝国は口にしたが、十九世紀以来の植民地支配の思想が継承されていることは明らかだった。これに対してアメリカ合衆国は

——それはポツダム宣言の精神に反する。

として拒否したが、当のアメリカ合衆国にしても、あわよくば日本列島のすべてを合衆国に併呑することを目論んでいた。ハワイに続く五十一番目の州にしようというのである。こうした各国の思惑が水面下でぶつかり、駆け引き

と妥協が行われた偶然によつて、日本は分割統治されることになかった。

あるいは日本政府がポツダム宣言の無条件受諾を正式に発表する一日前、満州における日本の資産分割について中国政府とソ連極東軍が協議を始めていた。ソ連は八月六日に対日宣戦を布告し、極東機械化部隊を満州に雪崩れ込ませて関東軍を撃破し、日本の兵士と非戦闘員を捕虜としてシベリアに送っていた。明らかなポツダム宣言違反であった。

だがイギリス、フランス、オランダ、アメリカなどは——ソ連とコトを起こすのは得策でない。

と判断して口を噤んだ。つまるところ日本の占領統治はつとめて政治的・軍事的色彩を帯びていて、第二次大戦後の国際政治世界におけるパワーバランスの縮図だった。

二

GHQが日本政府に指示・命令する間接統治方式をとつたのは、被占領民である日本国民と占領軍の間に深刻な軋轢が発生することを恐れ、「天皇」を緩衝材として最大限に利用するのがねらいだった。彼らは「日本」というものをよく研究していたし、実際、この方式はうまく行った。

日本政府にとってGHQの命令は絶対的であつて、超法規的な性格を持つものと認識された。それは一九四五年九月二十日付勅令「ポツダム宣言の受諾に伴い発生する命令に関する件」(ポツダム勅令・新憲法施行後「ポツダム政令」)に基づくものだった。勅令という超法規措置が、GHQの超法規的地位を保証したのである。

これに基づいて、一九四六年二月に「極東委員会」が政策決定の最高機関として、四月に「対日理事会」が最高司令官の諮問機関としてそれぞれ設置され、いずれにもイギリスやフランス、オランダなどヨーロッパ主要国の代表が参加していたものの、実質的にアメリカによる統治という性格は変らなかつた。ちなみに戦前、日本ワットソン統計会計機械の社長を務めていたモリス・シユバリエは、対日理事会にベルギー代表として参加していた。

このことは、戦後の占領政治が二重構造で運営されたことを意味している。GHQは日本の政治、経済、法制、民政を所管し、その中には国際赤十字の医療班やヨーロッパから派遣された文化・學術研究チームなどが属していた。マッカーサーが最も頼りにしたのは「法務局」だった。

「法務局」はGHQの組織外にあつて、その長にはGHQ民生局長であるコートニー・ホイットニーが任命されていた。民生局長は日本の軍国主義的な政治と行政の仕組みを

民主的かつ自由主義的なものに改革する仕事を負っていた。それを具体化するには法律を改めなければならない。

——であれば、専門の部局が必要ではないか。

というのがアメリカ合衆国の言い分だった。法律を改める作業を旧大日本帝国議会、軍部関係者、軍部に屈した政党内に任せるとは行かない。超法規的手続きで断行すべきである。とすれば、連合国軍総司令官であるマッカーサーの直屬機関でなければならぬ。

このごり押しとも思える理屈が通つた。

そもそもコートニー・ホイットニーという人物は、第一次大戦のとき、アメリカ合衆国陸軍の少尉であつたに過ぎない。一九二七年に退役して弁護士資格を取り、アメリカ領となつたフィリピンに移り住んで在アメリカの企業や富豪が現地に投資を行うに当たつて法律事務の委託を受ける事務所を開いていた。

フィリピン政府の軍事顧問として赴任してきたマッカーサーと親交を結び、マッカーサーの資産運用を任された。

日米開戦が不可避と判断した四〇年八月、ホイットニーはマッカーサーの推薦で軍役に復帰したが、そのとき彼に与えられた階級は「准将」という途方もない位だった。彼はすでに四十三歳であつたし、推挙したマッカーサーは陸軍中將にしてアメリカ極東軍司令官の地位にあつた。

——ワシの補佐役が元少尉というのでは、幕僚も現場の指揮官も言うことを聞かんではないか。

退役少尉の襟に、にわかには星が付いた。

以後、ホイットニー准将はまさに准将として仕事をした。

マッカーサーにコレヒドール要塞からの脱出を勧め、オーストラリアのシドニーからフィリピンの抗日ゲリラ組織を支援し、あるいは南西太平洋をカバーする無線通信網を構築した。

加えて彼は法律家でもあった。

八月三十日、マッカーサーとともに神奈川県厚木の滑走路に降り立ったホイットニーはGHQ民生局長に任じられ、東京・日比谷の第一生命ビルに専用の部屋を構え、かつマッカーサー直属の法務局長という重責を担うことになったのである。

三

ポツダム宣言の受諾に当たって日本政府は、次の三項目を条件にした。

- 一、保障占領はできるだけ小範囲にして、しかも小兵力でかつ短期間であること。

- 一、武装解除は日本軍の手によって行うこと。
- 一、戦争犯罪の処置は、占領軍の手によらず、日本側にまかせること。

日本はポツダム宣言を無条件に受諾したので、GHQは無視して構わなかった。ただGHQ——というよりマッカーサーおよび、その意を受けたホイットニー——は、それが日本側の強い要望である以上、なるべく意に沿う形でコトを進めようと考えた。

ところがアメリカの思うに任せない事態が発生した。とくに厄介だったのはソ連だった。

政策的なプライオリティとしてマッカーサーないしアメリカ合衆国が考えたのは、第一に天皇制の継続、第二に戦犯問題だった。しかしイギリスやフランス、ソ連は天皇制の廃止を強く主張して譲ろうとしなかった。加えてアメリカ合衆国政府の内対日強硬派（ないし好軍派）と知日柔軟派（ないし和平派）が対立する構図があった。

対日強硬派は国務次官補のジョージ・アチソンと陸軍情報部長のエルマー・デイビスだった。知日派は国務長官代理のジョセフ・グルー（前駐日大使）と極東通のドウマン国務次官補だった。この両派の上にあつて大統領トルーマンは、そのいずれを採るべきか判断に迷っていた。

やがてトルーマンがタカ派的政策に転換したことで、トルーマン対マッカーサーの対立を生むのだが、この構図はGHQにも現れていた。戦犯問題はアメリカ合衆国政府内の勢力争いと、連合国軍を構成する国々の思惑が入り組み、戦後の国際情勢をにらんだ政治力学のテーマになった。そこでマッカーサーは、戦犯問題を自分の差配から除外することと妥協することにした。むろん、

——自分が外れてもホイットニーがいる。

という計算はあつたであろう。

九月十日までに、GHQは三十九人の戦犯リストを作成していた。

筆頭は東条英機であつた——とされるが、実はそうではなかつた。この時点で戦犯リストの筆頭に挙げられていたのは「天皇」だつたのだ。

ここに鎌田詮一という人物がいた。

陸軍大学校第二十九期卒で四五年三月に編成された本土防衛軍第一総軍参謀副長を務め、少将。ポツダム宣言受諾に伴う占領軍連絡委員会の日本側副委員長として中将の職位にあつた。

日米開戦の八年前、陸軍工兵少佐のときアメリカ軍に研修生として派遣され、フォルトデュボン第一工兵連隊に大隊長として勤務した。そのときフェンシングの大会に出場

して優勝し、「カマダ」の名が知られた。彼を表彰し賞品のピストルを授与した当時の参謀次長が、現在、連合国軍総司令官となつて日本に赴任していた。厚木飛行場でマッカーサーを出迎えたのも鎌田である。

戦犯リストが作成された九月十日以後、天皇がマッカーサーを訪問した二十七日までの間に、GHQの親日派将官が鎌田を呼んで、戦犯リストを見せた。

その将官は彼にカミソリを渡しながら、

「この中に、すでに死亡している者がいたら切り取つて構わない」

と言つた。

そのリストはイギリスヤン連に回覧するために作成された政治的な、別の言い方をすれば欺瞞的なリストだつた。

鎌田はその場で最上位に挙げられている人物の名前を削り、次に続く皇族の名を切り取つた——という逸話が残っている。

その将官が誰であるのか、鎌田は明らかにしていない。ただ、それができたのはマッカーサーにごく近く、かつヨーロッパ諸国やソ連、中国に戦犯指定の主導権を握られにくいと考へており、日本占領統治の行政・軍事組織の改革に関与していた人物でなければならぬ。

ただし、マッカーサーができたのはそこまでだつた。

戦犯第一号として、東条英機が逮捕されたのは九月十一日だった。

東条には自決する時間があった。陸相・阿南惟幾、第五航空艦隊司令長官・宇垣纏、軍令部次長・大西瀧治郎中將、第一総軍司令官・杉山元などと同じように、死を覚悟したであろう。にもかかわらず自決しなかったのは、

——自分が自決してしまえば、誅が天皇に及ぶ。

と考えたためである、とされる。

だが逮捕に向かったGHQの将官があまりに高圧的であったことと、随行者団が無作法を働いたことなどから激しい怒りを覚えた彼は、短銃で心臓を撃ち抜いて自決を図った。ただしよほど頑強な心臓であったのか、医師団の懸命の治療で一命を取りとめた。

この事件を境にGHQは戦犯の逮捕を日本人に委ねることになった。

戦犯として逮捕された政治家、軍関係者は、広田弘毅（元首相）、板垣征四郎（元陸相）、賀屋興宣（元蔵相）、岩村通世（元法相）、井野碩哉（元農林相）、鈴木貞一（元国務大臣）、平沼騏一郎（前枢密院議長）、木戸幸一（前内大臣）、東郷茂徳（元外相）、重光葵（前外相）、木村兵太郎（陸軍大将）、ビルマ派遣軍総司令官）、荒木貞夫（陸軍

大将）、松井石根（同）、畑俊六（陸軍元帥）、真崎甚三郎（陸軍大将）、高橋三吉（海軍大将）、武藤章（陸軍中將）など百二十八人に及ぶ。逮捕されて当然の者もいれば、日米開戦の回避に尽力した者もいた。

戦勝国が敗戦国の政治家や将官を裁くのが真の正義であるか、という疑問は、極東国際軍事裁判でインド代表のラダ・ビノード・パール判事が示したにとどまった。東条、広田など七人の戦犯が絞首刑に処せられた四八年十二月以後、この疑問は

「戦争という名の罪において、ルーズベルト、チャーチル、スターリン、蒋介石も同罪ではないか」という国際世論となって表面化した。

そのことを論じるのは本書の目的ではないが、戦地で降伏した日本軍将官に対する私刑ともいえる現地裁判で九百三十七名が絞首刑または銃殺、百三十一名が自決もしくは獄中死をとげている。この事實は、パール判事の疑問に端的に答えている。

補注

アメリカ合衆国五十一番目の州 一九四五年九月、宮内庁御用掛の寺崎英成はマッカーサーにあてて「天皇はアメリカが沖繩をはじめとする琉球の地を占領し続けることを希望している」というメッセージを伝えた。沖繩をアメリカに譲ることで本土を独立国家とする交換条件を示していた。

G H Q の日本研究 真珠湾攻撃の前から『菊と刀』を著わしたルース・ベネディクト (Ruth Fulton Benedict / 1887 ~ 1948)、コロンビア大学教授などを起用し、専門チームを設けて日本の歴史、文化、風土、宗教・思想、習慣などを調査した。対日占領政策が比較的うまくいったのは、こうした研究の成果だった。

極東委員会 Far Eastern Commission : F E C : 極東諮問委員会に代わる機関として設置された。本部はワシントンに置かれ、委員会は米・英・中・ソ・仏・印・蘭・加・豪・ニュージーランド・フィリピンの十一か国の代表で構成された。ここで決定された政策は米政府を通じて連合国最高司令官に指令として伝達されることになっていた。

委員会の決定には米・英・中・ソの四か国に拒否権が与えられていたが、緊急を要する問題については米政府に指令を発する権限が与えられていた。ただし、日本の憲政機構、管理制度の根本的変更および日本政府全体の変更については、必ず委員会の事前の決定を必要と定められた。

対日理事会 Allied Council for Japan : A C J : 極東委員会の出先機関として東京に設置された。理事会は日本軍と戦ったヨーロ

ッパ諸国やアジアの代表で構成されたが、米・英・ソ・中の四か国が代表理事国として拒否権を持った。当初は米国代表である連合国最高司令官が議長となったが、実際には G H Q 最高司令官であるマッカーサーを監視しチェックするねらいがあった。国際連合における常任理事国制度がそのまま導入されていた。

ジョージ・アチソン George Atcheson / 1896 ~ 1947。アメリカ・コロラド州デンバーに生まれ、ジャーナリストとして働きながらカリフォルニア大学を出た。一九二〇年、中国・北京のアメリカ大使館通訳見習生となったのがきっかけで外交官として活躍した。四一年に国務省極東局長、四五年九月にマッカーサーの顧問として連合国軍総司令部外交局長を兼ね、四六年五月「共産主義を歓迎せず」の声明を発表したことで知られる。四七年八月、ハワイ沖で航空機事故のため死亡した。

極東国際軍事裁判

ナチス・ドイツや大日本帝国の政治指導者や戦場での残虐な作戦を立案・指揮・遂行した責任者に対して、即時処刑すべきとする意見もあった。報復は次の報復を生むとして、公な手続きに則った裁判を主張したのはアメリカ陸軍長官のヘンリー・スチムソンだったと言われる。

一九四五年六月時点で作成された戦争犯罪者リストには、天皇裕仁を筆頭に陸軍百七十三人、海軍十三人、政治家四十一人、財界人など二十人が挙がっていた。B・C級戦犯を加えると二千五百人を超えていた。

四五年十二月六日に軍事法廷で首席検事を務めることになるジョセフ・キーナン (Joseph Berry Keenan / 1888 ~ 1954) が東京に入り、四六年一月、極東国際軍事裁判所条例 (憲章) が

定められ、被告二十八人が確定した。このとき執行委員会が公表した「平和に対する罪」「人道に対する罪」が戦争犯罪を裁く基準となった。

裁判であるため被告には個別に弁護人が付けられた。弁護団は衆院議員・貴族院議員、明治大学総長などを務めた法学博士の鶴澤總明を団長に、アメリカ人を含め約百三十人(途中交代を含む)だった。

一九四六年(昭和二十一年)五月三日に開廷され一九四八年(昭和二十三年)十一月十二日に閉廷した。法廷が開設されたのは東京・市ヶ谷の旧陸軍士官学校の講堂だった。

判決は次のようだった。

▼死刑…板垣征四郎、木村兵太郎、土肥原賢二、東条英機、武藤章、松井石根、広田弘毅…一九四八年十二月二十三日執行

▼終身刑…梅津美治郎、白鳥敏夫(四九年獄中で死去)／小磯国昭(五〇年獄中で死去)／岡敬純、畑俊六、南次郎(五四年釈放)

／荒木貞夫、大島浩、賀屋興宣、木戸幸一、嶋田繁太郎、鈴木貞一、橋本欣五郎、(五五年釈放)／佐藤了賢(五六年釈放)／平沼騏一郎(五七年釈放)／星野直樹(五八年釈放)

▼懲役二十年…東郷茂徳(五〇年獄中で死去)

▼懲役七年…重光葵(五〇年釈放)

▼判決前に死去…永野修身、松岡洋右

▼訴追免除…大川周明

ラダ・ビノード・パル Radha Binod Pal / 188869-1697。
インドのベンガル州に生まれ、一九〇八年、カルカッタのプレジデンシー大学大学院の数学科を修了した。法学を志したのは一九二〇年からで、四四年にはカルカッタ大学副学長の職にあった。

四六年、極東軍事裁判のインド代表に任命され、四八年十一月、「パール判決」と呼ばれる独自の見解を示した。そこで彼は極東軍事裁判の性格を「事後法的性格が強い」と指摘するとともに、戦争における個人の責任を否定し、かつ「侵略戦争」や「共同謀議」の定義が曖昧なままでの裁判そのものを疑問視した。

他の連合国側判事が無視したアメリカ軍の原爆投下についても、「その命令こそ戦争犯罪である」と指摘したが、大日本帝国軍部が引き起こした戦争そのものを肯定する内容ではなく、従って日本の無罪を主張したわけではなかった。広島原爆ドーム保存工事に基金を寄せるなどの行為を通じ、アメリカ合衆国をはじめとする連合国側にも戦争犯罪があったことを訴えた。

日本IT書紀 05 淹滞篇 卷之十 焦土

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。